

第四章 京都の十六師団と捕虜の大群

一 紫金山の攻略戦

十六師団は京都、奈良を中心とする近畿地方一帯の兵によって編成された現役師団であった。この師団は、それまで北支に在ったのだが、中支の上海戦が予想外の激戦、苦戦となり、増援が課題となったおり、上海派遣軍へと編入されたのであった。その編制は、次のとおりである。

第十六師団 師団長 中島今朝吾中将

歩兵第十九旅団 草場辰巳 少将

京都 歩兵第九聯隊

福知山 歩兵第二十聯隊

歩兵第三十旅団 佐々木到一少将

津 歩兵第三十三聯隊

奈良 歩兵第三十八聯隊

師団は四つの船団に分れ十一月中旬、上海に近い揚子江岸の上流、白茆口はくぼうこうなどに上陸した。そして、常熟、無錫の要衝を抜き、総崩れとなった中国軍への追撃戦となったのだが、闘いの相手

は中国兵だけではなかった。雨と泥濘でいねい、そして橋をすべて落とされた無数の水濠クリムクとの闘いでもあった。

これは独り十六師団のみならず、派遣軍の他の師団も、また杭州湾に上陸した第十軍の師団も、すべて共通したものではあったが、それでも師団の将兵は壊走する敵を追って、遮二無二しゃにむに進撃した。

とにかく、こうして前例のない長距離の急進撃となったのだが、ために、時には中国兵を追い越してしまい、彼らのほうが後にとり残されるという事態まで出現した。広大な沃野よせが打ち続く中国大陸ならではのことだが、ある隊では、一夜ともに行軍した隣の兵士が、夜が明けてみたら敵兵だった、というような椿事ちんじさえ少なくなかった。

これら後方に残された中国兵は、その多くが軍服を脱ぎ捨てて一般市民を装いよお、つまり便衣兵ゲリとなつて後続部隊や補給隊を襲った。この便衣兵による被害は、敵への憎悪を倍加させていったのである。

そうして一ヶ月、師団は南京城目前に迫つたのだが、上海から南京までは、ちょうど東京名古屋間にほぼ匹敵する。だが参戦者はもつとある、と言う。銃を担いにな、悪路と戦い、無数の河や濠を越えていくのである。しかもそれが戦闘をしながらということであれば、それは果てしなく遠い道というのが実感であつたに違いない。今日の機甲師団なら、一日に百キロも挺進可能だから、

一ヶ月で進撃したとしても少しも不思議はないのだが。

南京城目前とはいえ、その行く手には敵の要衝紫金山がある。まずここを抜かなければ南京城へは迫れない。十六師団は、まずこの東の要衝紫金山へと挑んでいった。

この紫金山は、南京城のすぐ東方にある小山で、幾つかの峰が東西に並び、さらに城との間、北寄りに玄武湖という美しい湖があるから、城壁からの景観はまことに見事というほかはない。

だがそれも、一度軍事的な面から見れば、南京城にとつては、南の雨花台と同様きわめて重要な出城となる。それは紫金山は外周の湯山と複廓の陣になっており、したがってここを奪われたら、南京城は裸同然で、残るは堅固なりといえど、あの城壁が残るのみとなる。

それだけに防備は厳重、その攻防もまた激烈をきわめた。守るは蒋介石の虎の子といわれた、精銳教導総隊の一個旅団ほかであった。

この紫金山を、十六師団は南に草場旅団、そして北には師団直轄ちよっかつとした津の三十三聯隊を配置し、攻撃を開始した。しかし紫金山の北側は、何分にも勾配こうばいが急であり、かつ巨大な岩石でおわれている。

そしてその間隙かんげきを埋めるようにして、多くの掩蓋陣えんがいが構築されている。その銃眼から見下すように砲と機銃を射ってくるであろうから、その攻略は容易なことではない。まさに、攻むるに難かた

中山腹

紫金山 第一峰

第二峰

天王台



第十六師団木佐木參謀描く「城内から望む紫金山」(『南京戦史』より)

く、守るに易い典型的な天然要害の堅陣であった。だが、総攻撃の命は下った。十二月十日午後一時三十分、攻撃は開始された。

もちろん津の三十三聯隊も、またこれを直轄とした師団も、相当な犠牲を覚悟のうえではあったが、はたせるかな予想どおり寸土を争う壮絶な戦いとなっていた。これを、北東の麓に布陣した独立攻城重砲の一個中隊、十五糎榴弾砲りゅうだん三門が支援する。

どの中隊も、一步登ればたちまち敵の猛射を浴びた。そのうえ上から手榴弾までがころころと音をたてて転がり落ちてくる。とにかく身動きひとつならぬ状況が続いたのだが、それでもその間隙かんげきをぬ

い、また夜陰に乗じて銃眼に近づき、手榴弾を投げこみ、掩蓋陣トリスカを一つ一つと潰つぶしていった。

あるいは敵の壕に飛びこんでの白兵戦、だが奪ったと思うと、敵もまた大挙して逆襲してくる。こうして筆舌につくしがたい激闘が、三日三晩にわたってくり展ひらげられていった。その奪い取った壕の中は、どこも敵の屍体、味方の戦死体であふれ、まさにここも、地獄の修羅場しゅらばそのものであった。

こうして第三峰をまず奪い取り、続いて十一日の夜、おりしも北麓から攻め登ってきた第九師団とともに第二峰を占領した。戦線が輻湊ふくそうし、思いがけず九師団の一部、富山の三十五聯隊がそこに進出していたのであった。なおこの間の戦闘で、歩三十五は第一大隊長菅原梅吉少佐、中隊長野田耕夫大尉を失った。

そして翌十二日、陽も落ち辺りが闇に包まれたころ、主峰に最後の猛攻をかけ、ついにこれを占領した。時に、十二日夜六時三十分であった。こうして、さしもの要衝紫金山もすべて占領したのであった。

羽田武夫氏 津三十三聯隊第二大隊機関銃中隊

攻撃は、昼夜を問わず白兵戦でした。しかも飲まず食わずで、夜は山上の寒風が身にしみます。十二日の夜、二百ほどの敵に逆襲され多数の戦死者をだす有様で、手榴弾の投げあい、

突撃の連続です。

塹壕ざんこうの中には、敵味方の戦死体が三重四重に重なりあい、まだ生温かいその死体の上を、敵弾を避け匍匐ほふく前進していきました。接近戦には重火器も使えません。まさに肉弾戦で、誇張でも何でも無い、とにかくひどい戦闘でした。それを支えたのは、悲壮な使命感だけだったと思います。

一方、草場辰巳少将ひきの率いる旅団は、京都の九聯隊と福知山の二十聯隊が、ともに紫金山の南麓を西に向かつて攻め登っていった。こちらは傾斜はゆるく、かつ緑多き景勝の地であったが、それだけに、ここにはまたここなりの特異な悪条件が出現した。

それは、南斜面には明孝陵や、国父孫文を祀まつった中山陵がある。またさらに寺院などの名所、旧跡があり、こうした文化遺産にたいしては、いっさい攻撃はまかりならぬ、というのが松井大將の方針だったからである。

だが、本来なら自国のこうした文化遺産の保護にたいしては、中国軍のほうが配慮すべきであるところだが、彼らにはそんな斟酌しんしゃくはいっさいなかった。むしろ日本側のその方針を、逆に利用し防禦陣地に組みこんでいったのである。これでは、苦戦するのも当然であった。

「あの五重の塔に、観測所がある。あれを砲撃させて下さい」

隊内に、そういう声があがった。だが青柳大隊長は、それを許さなかった。こうしたこと、あつたのである。

こうして文化遺産を守るといふ、松井軍司令官の示達は、最前線においても厳然として守られていったのだが、それだけ苦戦を強いられたことも事実だったのである。

ところが、何でも日本軍のせいにするというメディアの傾向は依然根強く、ついこの平成七年の五月にも、こんなことがあつたのである。NHKのニュースだが、

「日本軍の砲撃で破壊された南京城壁十キロほどを、日中共同で修復する事業が始まった」といふ。そしてその修復のため、贖罪しよくざいの意をこめて日本人からの募金と、作業のボランティアを募っているという。もちろん日本軍の砲撃で、こんなに壊せるものではない。

それは、あの文化大革命のおり、何でも古いものは壊せとばかりに、南京の城壁も北のほう十キロほどを壊し、都市化してしまつたのである。これは一般観光客にも、ガイドが説明していることで、NHKがこれを知らぬとは思えない。にもかかわらずこうした報道をするのは、中国政府や日本の視聴者への媚こびなのであろうか。いずれにしても、あるまじき行為だ。

二 佐々木旅団の混戦

紫金山で激しい争奪戦がくり返されている頃、十六師団のもう一つの聯隊、奈良の三十八聯隊は、紫金山の北、山麓平野部にあり、その地域の敵を撃破しつつ、南京城の北を目指して進んでいた。

この奈良の三十八聯隊は野砲兵大隊、軽装甲車中隊などとともに、佐々木到一少将の指揮下にあり、紫金山北部の広い平野地をこの少ない兵力で戦っていた。当初の予定より、担当地域が広くなつてしまっただけに、いきおい兵力は分散しがちとなり、そこへ敵が入りこむなど、戦線は混戦、乱戦の様相を呈していた。

それは、何分にもこの旅団は、片腕ともいべき津の三十三聯隊を、紫金山攻略のため師団直轄ちよつかつとされている。したがって手許にある歩兵は、奈良の三十八聯隊のみという状況であるから、兵力過少となり、間隙を生ずるのも無理なかつたのである。

伸びきつた戦線では、敵と思えば味方、味方と思えば敵というように、後方の司令部とて安閑

としてはいられない。その日旅団司令部にあり、明け方まで作戦指導に追われていた佐々木少将は、しばしまどろんだかと思うと、たちまちもの音に眼を醒さまされた。その辺の消息を、私記抄から拾ってみよう。

十二月十三日、午前八時ごろ、至近の距離に激烈な銃声がして、通信手や行李の輜重兵、特務兵までが銃を執つてばたばたやっている。

「何事だ！」

屋外を走りかけた副官にたずねる。

「今撃退したところです。紫金山から真つ黒になつて降りてきました」

「敗残兵か？」

「チェックを腰だめで撃つてくるのです。それが何回も何回も五、六百いっしょになつて鉄砲をとりあげろ」

「降伏なんかするもんですか。皆殺しです」

来るは、来るは、あつちにもこつちにも実におびただしい敵兵である。彼らは紫金山頂にあつた教導師の兵で、血路を我が支隊に求めて戦線を逆に討つてたものであつた。銃声の間、怒号罵声すら聞こえてくる。

家屋にたてこもっていつまでも抵抗する者、いち早く便衣にかえて逃走をはかる者。そして三々五々降伏する者はかならず銃器を池の中に投じ、あるいは家の中に投げこんで放火していた。この点は実に徹底していた。当面の敵は蒋介石が虎の子のようにしていた師団だけあつて最後まで、もつとも勇敢に戦つたようである。

（『旅団長 佐々木到一私記抄』）

こうした状況は、佐々木少将の旅団司令部のみならず、はるか後方の湯水鎮にある上海派遣軍司令部でも、まったく同様なことが起つたのである。周囲を敵に囲まれたのを見て、司令部の要員は皆、その責任の重大さに緊張した。それは、何分にも軍司令官は宮家だったからである。

だが幸いにも、急を聞き駆けつけてきた友軍に救われたのだが、一時は司令部はもとより、それを知つた各部隊の幹部たちも騒然たる雰囲気きふきに包まれたのであつた。まさに桶狭間かきさまの再現かという場面だったのだが、中国軍が戦意を喪失そうしつしていたため、ことなきを得た。さもなくば、戦軍隊の救援すら間にあわぬことになつたかもしれないのだ。

三 仙鶴門鎮の捕虜

また、紫金山北方の広い平野部の中ほど仙鶴門鎮付近には、集成騎兵隊があり、その指揮は先任の第九騎兵聯隊長の森吾六大佐がとっていた。

集成騎兵隊というのは、その名の示すとおり、それまで各師団に散っていた四つの騎兵聯隊を集めた部隊であつた。佐々木旅団の担当区域は、紫金山北方の広大な平野部であつたため、その間隙を少しでも埋め、また敵の退路を断つべく下関シヤウカンへと進出するには、機動力のある騎兵隊は格好の存在だったのである。

そして、十二日深夜のことであつた。

「兵力不明の敵大部隊、本道上を怒濤どとうの如く東進中、中隊は目下この敵と交戦中」

との伝令が、騎兵第三聯隊の本部へ入つた。聯隊長星善太郎中佐は、ただちに戦闘配置を命令すると同時に、集成騎兵隊本部にも通報し、ここに全騎兵隊は戦闘態勢に入つたのである。

だが何分にも暗闇の中でのことであり、応戦は困難をきわめた。敵は遮二無二押し寄せてくる。

たちまち乱戦、混戦、そして白兵戦となった。

この十二日は、昼から夕刻にかけ城壁は随所で破られ、城内の中国軍は総崩れとなっていた。逃れるところは、北の下関方面か、あるいはいまだ日本軍の進出していない東方しかなかったのである。

この中国軍も、東の玄武門や太平門を脱出し、さらに玄武湖の南を廻って、この仙鶴門鎮付近まで来たのだが、そこで騎兵隊とぶつかってしまったのである。いかに兵力稀薄で間隙が生じ易いとはいえ、やはりこのような大軍が包囲網を突破するということは、まずもって不可能だといえよう。しかも彼らは、すでに戦意を喪失しているため、二万もの大軍でありながら壊滅的な打撃を受け、結局は四散してしまう。

戦闘は終夜続き、夜が明けるとさらに追撃戦の様相となり、九時ごろようやく銃声が止んだのだが、終ってみれば辺りは敵の遺棄屍体でいっぱいであった。その数三千、と騎兵隊は報告している。

その遺棄屍体の中には、この大軍の中核となっていた百五十九師の師長の戦死体も含まれていたのだが、これは彼らの命運を象徴するような出来事ではあった。

とにかく、こうして暗夜の激闘は終わったのだが、我がほうの損害も大であった。

ところが十三日の未明だが、またも騎兵隊は敵の大軍に襲われたのである。この日、城内はすでに掃討が行なわれ、ほぼ日本軍は城内を制圧していた。しかし紫金山方面は、入り組んだ山であるがためか、各所にひそんでいた敵兵が、これまた深夜脱出をはかり大挙して出てきたものと思われる。

集成騎兵隊は再び応戦に入ったが、そのすぐ後方には、独立攻城重砲第二大隊第一小隊の將兵が、十五糎榴弾砲^{サンチ}一門を囲んで、自衛の隊形を整えていた。前夜も少数ではあったが、敵兵がこの重砲陣にまで乱入してきたのであった。幸いにも被害はなかったが、今夜はどうなるかわからない。

この重砲陣のほか、北二キロほどの墓地横には、同じ中隊の榴弾砲二門が陣を敷いていた。本来なら仙鶴門鎮の陣にも、もう一門の砲が据えられるはずであったが、進撃の途中常熟の手前で砲架車が仮橋ごと濠の中へ落ちてしまったのである。

そしてここでは、両陣とも紫金山攻撃に参加していたのだが、紫金山攻略後は、佐々木旅団に協力することになっていた。

しかし、今はそれどころではない。本来後方の安全地帯に在るべき重砲陣が、敵襲の危険にさらされようとしているのである。また護衛の歩兵部隊もない。自力で砲を守らねばならなかったのだが、中隊の將兵には小銃の射撃も一切禁止されていた。暗闇のため同士討ちを避けるため

もあり、また敵に察知されないためでもあった。

庄野欧一少尉以下、中隊の将兵は銃を持したまま闇の中に響く戦闘音に、じつと耳を傾けていた。騎兵隊の射つ重機関銃のドドドツ： という重い音が絶え間なく聞こえる。時折その中に迫撃砲の激しい炸裂音さくれつが闇を裂く。敵の悲鳴とも喊声かんせいともつかぬ声が、幾つも輻湊ふくそうして不気味さをいつそうかきたてていた。そして鳴り響くチャルメラのような彼らのラツパ。それが前進を意味するのか、退却を告げているのかさっぱり分らない。

こうして数時間、やがて次第にこれら戦闘音も沈静化し、そしてついに戦闘は終わった。しかし、その背後にいた重砲陣の将兵にとっては、長い長い時であった。

やがて東天に明るみが射しこめ、ようやく十四日の朝を迎えた。

仙鶴門鎮の重砲陣は、こうしてとにもかくにも無事だったのだが、この北二キロほどの墓地横に布陣した中隊主力では、その安否を気遣っていた。

夜が明けると同時に、中隊長の梶浦俊彦大尉と、観測班長の沢田正久少尉は車に飛び乗ると、仙鶴門鎮の重砲陣へと向かった。わずか二キロほどの道程ながら、仙鶴門鎮のほうへ近づくと、敵の遺棄屍体が多くなるのが気になる。そして、重砲陣のすぐ近くまでくると、どこも屍体が転がり、まさに累々るいりたる状況であった。

だが、そんな状況の中にありながら、庄野欧一少尉以下全員が無事だったのである。もちろん、火砲にも異状はなかった。この奇跡ともいふべき状況に、二人は驚き、かつ喜んだのだが、まったく発砲をしなかったため、敵はこの重砲陣の存在に気付かなかったのかもしれない。

梶浦大尉と沢田少尉は、この無事を確かめるとだちに引き返してきたのだが、それから一時間ほどたち、陽もようやく高くなりかけた、八時頃のことであった。沢田少尉は、ふと楊房山のほうを見て驚いた。

この楊房山というのは、重砲陣の北一キロほどのところにある丘のような小山で、五十メートルくらいの高さがあるため、ここに観測所を設けてあったのである。その楊房山に、西のほうから敵の部隊が続々と登っていくではないか。

「何？ それは友軍ではないのか？」

急ぎ報告した沢田少尉に、梶浦中隊長はそう答えた。だが、そうではなかった。それは明らかに中国軍で、しかも部隊の列は延々と西のほうへ延びているのであった。数千、いや万を越す、それこそ大部隊だったのである。

ただちに中隊は、重砲二門を囲んで分散展開、戦闘態勢に入った。敵は早くもこの重砲陣に気づき、チェコ機銃、小銃を乱射してくる。我がほうも応戦するが、いかにも多勢に無勢、中隊員はここには百四十名くらいしかいないのである。しかも戦闘に不馴れた砲兵ばかりで、護衛の歩

兵はまったくいない。まさに重砲中隊の命運は、風前の灯かと思われた。

実際、もし彼らに闘志があつたなら、眼と鼻の先にある、彼ら大軍にとっては芥子粒ほどの小さな陣は、あつという間に蹂躪されてしまつたであらう。だが幸いにも、彼らにそうした旺盛な戦意は見られなかった。それが救いだつたが、それでも中には進んでくる敵もあり、中隊の将兵は墓を巧みに利用し応戦していった。

梶浦中隊長は、敵を威嚇するため、砲一門を操作し、零分画射撃に入つた。砲は火をふきながら、轟然たる音をたてていく。すると次第に敵は、山の反対斜面へと身を隠していった。その音と爆風は、彼らを脅す充分な効果があつたのである。

こうして一進一退の戦闘数時間、やがて遠く遙かに友軍が姿を現わした。救援に駆けつけた、奈良三十八聯隊の十中隊だつたのだが、ここにおいて敵は反抗をあきらめ、白旗をかかげ投降してきた。それは、ちょうど正午になるところであつた。

彼らは列をなし、いとも整然と山を下つてきた。しかし来るは来るは、幾つもの列が延々と続き果てることがない。いったいどれほどの大軍であるのか、一見したところそれは万にも及ぶ数に思えたのだが、重砲中隊と援軍の歩兵中隊の將兵たちは、今度は彼らの武装解除に追われていた。

そして武器を取りあげた彼らを、道路下の田圃へ集結させたのだが、皆従順でしかもよく統制

がとれていた。だがこの思いもかけぬ大量の捕虜をいかに処遇すればよいのか、早速通信班が軍司令部にその指示を仰いだ。だが返ってきたのは、

「ただちに処分せよ」

という、非情なものであった。捕虜を養い保護していくだけの余裕がないのはよく分るが、さりとてそんなことが出来ようはずもない。司令部にそう返答すると、

「それでは、中山門まで連れてこい」

と、言う。だが、それも実際には不可能であった。そんな兵力の余裕はない。

「それでは、四個中隊の増援をだすから、中山門まで連れてこい」

と、やつのことで結論を得たのであった。

そしてしばらくすると、捕虜護送のための要員が到着した。これは奈良三十八聯隊の第三大隊などから選抜された混成の一隊で、かならずしも四個中隊全員がそろっているわけではなかった。だがとにかく、捕虜の移送は始められた。

四列縦隊の彼らは、ここでもきわめて整然として指示されるままに歩いた。両側には十五メートルおきくらいに、銃を持った護衛の中隊員がつき、肅々と南京城を目指したのである。武装解除はされているものの、彼らは縛しばられてもいない。その気になれば、逃亡も不可能ではなかった。

だが、彼らにはそんな素振りはいま一つ見られなかったのである。

沢田正久氏 独攻重第二大隊第一中隊観測班長

彼らの多くは胸に「首都防衛決死隊」の布片を縫いつけていました。その数は戦場ですからそう正確には覚えていませんが、八千以上はいたと思います。

正規兵の他に大学生などの志願兵もかなりまじっていました。全員軍服でしたが、英語を話す者もいたり、時折交わされる会話などからも、インテリさが感得されました。

この年、昭和十二年の六月、私が陸士を卒業する直前でしたが、市ヶ谷の大講堂で飯沼守生徒隊長は、「捕虜の取扱いについて」という題で記念講演をされ、そこで捕虜は叮嚀ていねいに扱わなければならない、と教えられました。

その生徒隊長は、今上海派遣軍の参謀長であります。卒業後わずか五ヶ月の今日、「ただちに銃殺せよ」とはいつたい誰が決定し、誰が命令を下したのか。私の胸は痛みました。この印象は、従軍中はもとより、五十年後の今日でも私の脳裏を離れません。

誰が銃殺命令をだしたか、今日でもそれは判然としないのだが、三十八聯隊の副官であった児玉義雄氏は、十六師団の次級副官が電話口で、

「降伏を受け入れるな。処置せよ」

と、言っているのを聞いている。

十六師団長中島中将は、「捕虜はせぬ方針」だと側近に漏らしていたことは事実のようだが、それはあくまでも、「蹴散らせ」ということであつて、捕虜にした後に処断せよということではない。

「兵力に余裕がない以上、降伏してきても戦場で蹴散らしてしまうほかない。でなければ、自軍が危機に陥る」

と考えたのだろうが、それが土壇場になつて側近の口をついて出た。これを受けた通信隊員は処断命令と解釈し、中隊長に伝えた。今となつてはこれ以上の解明は不可能だが、いづれにしてもたとえ一時とはいえ命令権のない次級副官の意向を、正式命令と受けたほうは、確かに大きな衝撃であつたに違いない。

そしてこのほんのわずかな間の電話のやりとりが、今日においてもなお一つの汚点として残り、これがため、あらぬ誤解を生む元になつてしまった。

だがとにかく、そこへ至らずにすんだ。司令部の側近とて、大量の捕虜を眼まのあたりにしたら、とてもそんな言葉はでてこなかつたに違いない。なおこの時の捕虜数については、沢田氏の言われる八千以上のほか奈良三十八聯隊戦闘詳報は七千二百とし、また中には二千くらいとする前線

小隊長の言もある。

だが戦場というのは、極度の緊張と混乱の場であるということを考えると、数は多く見える可能性が強いし、報告はとかく誇大戦果になる。こうしたことを併せ考えれば、師団関係者の、

「この時の捕虜は、そう多くはない。せいぜい二千か、三千くらいだろう」

という声も、むべなるかなと思う。結局これら見解の相違は、戦場における数の把握がいかに困難なものであるかということ、よく物語っているのだが、とにかくその現場に居合わせても、これだけの違いが出るのである。

この時の捕虜投降は、北は堯化門から南は仙鶴門鎮、さらには下麒麟門きりんにいたるまでの、広い地域にわたっていたこともあって、その数のみならず、その消息も判然としなかった。

しかし偕行社が戦史を編纂へんさんするにあたり、多くの記録や証言を元に解明していったところ、結局この捕虜集団は中山門を経由して、城内の中央刑務所に収容され、その後半数ほどが上海や上流の炭坑に移送、使役に従事していたことが明確となった。

その責任者は、榊原主計参謀であったが、さらにその時の経理将校の言によれば、使役の者は日本兵の給料五円五十銭とほぼ同額の、月五円が支払われたという。

四 揚子江岸 下関への突入

紫金山北方の平野部では、後方の司令部や重砲陣まで襲撃されるという混戦乱戦が続いていたが、一方佐々木旅団の先鋒部隊は、独立軽装甲車中隊を先頭に、奈良三十八聯隊の一部がなおも西進し、南京城の北、揚子江岸にある下関へと突入していった。

時に、十二月十三日 午後一時四十分であった。

おりしも下関は、南京城を脱出しさらに渡河しようとする中国軍でごった返していた。仙鶴門鎮で大量の捕虜がでる、まる一日前のことである。この十三日未明から、城内の軍は崩壊し、雪崩を打って城外へと脱出していたのである。

しかし河を渡ろうにも、舟艇の数は少ない。すでに大型の船は、軍幹部らの脱出に使われたこともあつて、残るは機帆船、小舟くらいで、後はこれも数少ない筏や板つぺらまで奪いあいとなつていた。しかも江岸を目指す兵士らは、陸統として後を絶たないという、最悪の状況であつた。また一部は渡河をあきらめ、揚子江に沿つて下流へ行く者、あるいは上流へと行く者、とにか

く逃げ場を求めての右往左往であつた。統制を失つた軍隊ほど惨めなものはない。

そこへ、軽装甲車中隊を先頭とする、奈良三十八聯隊が突つこんだのである。重機、軽機が唸りをあげ、逃げまどう彼らを掃射していった。だが中には、勇敢に反撃してくる者もあつた。また逃げながらも、時折立ち止まつては機銃を乱射してくる者もいる。

しかしそうした反抗も空しく、逃げまどう彼らはたちまちのうちに薙ぎ倒されていった。軽装甲車はなおも進み、遂に江岸に到達した。追われた彼らは、水の中にそのまま飛び込んでいった。中にはわずかな木片を頼りに、河の中へと泳いでいく者もあつたが、そんな彼らにも、銃弾は容赦なく浴びせられていく。

彼らの多くは、とうに武器を捨て、軍服軍帽をも打ち捨てていた。一般市民を装えば、逃亡に有利と思つてのことだろうが、それは戦場においては通用しない。

こうして下関シヤウカンの地域一帯は、随所に地獄の修羅場が出現していったのだが、そこへ聯隊主力も続々と到着し、さらには津の三十三聯隊も戦列に加わり、下関シヤウカンの戦線は、最終的な段階を迎えたのであつた。

津の三十三聯隊主力が、下関へ到達したのは十四時三十分となつているが、この聯隊は紫金山攻略を果たした後、師団直轄を解かれ、佐々木旅団に復帰しこの下関へと進撃してきたのであつた。

なお下関の戦場跡には二千とも三千とも言われる戦屍体が残されたが、もちろんこれは、虐殺などとは何の関係もない。このことは、中国側記録によっても明らかなのである。

五 海軍十一戦隊の突入

そしてさらに、この時揚子江を溯航そこうしてきたのが、海軍の十一戦隊であった。この艦隊は上海に在る第三艦隊の一部で、旗艦安宅あたかを先頭に、揚子江を遡りさかのぼつつ、沿岸の砲台や敵陣に砲撃を加え、陸軍の作戦を支援してきたのであった。

もともと本作戦の場合、艦艇の行動は沿岸や揚子江にかぎられていたし、それより国民の耳目を集めていたのは、初期においては上海の陸戦隊であったし、また三竝貞みなみ三大佐の率いる第二連合航空隊の活躍も、新聞雑誌などにはよく掲載されていた。

特に空戦で片翼を半ば失いながら、よく上海の大公飛行場に帰還した樫村三空曹の話題など、紙面を賑わしたものであった。当時海軍次官だった山本五十六中将は、この写真がいたく気に入って、次官室にずっと飾っていたという。

第三艦隊は司令長官、長谷川清中将、旗艦は出雲いづもであった。そして十一戦隊は、近藤英次郎少将が率いていたが、その十三日、陸軍部隊が下関シヤークンに突入した一時間余の後には、この十一戦隊

が下関シャカに到達していた。

その前衛部隊は砲艦保津、勢多を先頭に、駆逐艦山風、涼風すずかぜ、さらに四隻の掃海艇などであった。そしてその後には主力部隊である砲艦安宅、熱海、駆逐艦の江風かわかぜ、海風、鵲かさぎ、鴻おとりなどが続いている。

これら十一戦隊の艦艇が、霧の晴れあがった揚子江を、岸边からの射撃に反撃しつつ、また江上を逃げまどう敵の小舟を掃射しつつ溯航してきたのであった。

そして下関に接岸した艦からは、陥落直後の南京を海軍々人として、初めて南京城内を視察した士官がいたのである。

関口鉦造氏 砲艦勢多・乗組次席大尉

下関碼頭に接岸後、一種軍装に陸戦バンドをしめ、軍刀を下げると一人で城内へ向かいました。

途中、星条旗を掲げている病院があつたので、のぞいてみると米国人が出てきた。私は自分の官姓名を名のり、城内の様子を聞いてみました。彼は米国大使館の、フィッチ氏とのことで、

「城内は難民が溢れているし、便衣兵に姿をかえた支那兵も潜入している。一人で行くな

んで危険だ。本当は帰ったほうがいいんだが、とにかく送ってあげよう」

そう言つて、車で挹江門ゆうかうまで送つてくれました。でもそこから先へは行きたくないようでしたので、私は厚く礼を言い、車から降ろしてもらいました。しばらく行くと、陸軍の哨兵に会いましたが、敵と間違えられ危うく射たれるところでした。でもすぐ下士官が飛んで、

「大尉殿、大変失礼いたしました」

と恐縮し、危ないからと言つて護衛の兵を一人つけてくれました。海軍の陸戦バンドなどが、敵の将校の服装に似ていたため、だいたい護衛なしに一人で行くなんて、乱暴きわまる話だったんです。

城内の難民区は、女子供でごった返していましたが、若い男の姿は見かけませんでした。でも時折、窓越しに険悪な眼つきの男がいて、便衣兵らしく思えました。

帰途、挹江門ゆうかうから碼頭への道は主要道路であるため、日本軍の検問所が幾つもあり、往き来する支那人は、嚴重に検査されていました。道の西側には敵兵の屍体が時折散見できる程度でした。

虐殺などという話は、その時も、またそれ以後翌年十月内地勤務になるまで、一度も聞いたことはありません。

南京城付近の重砲や烏龍山砲台は、日本軍の猛爆が功を奏したのか、あるいは我が陸軍部隊が占領したのか、今日はその真下を通つても一発も射つてこない。そして遂に獅子山砲台の真下を通り過ぎて、午後三時五十九分、十六師団の一個小隊が日の丸の旗を掲げ突進してきた中貨棧橋に横付けした。

江上には相変わらず一面に中国兵の乗つた浮遊物が流れていたが、弾丸が欠乏して射つことができない。ところが小隊長が、

「あれを射つて下さい。敵兵ですよ」

と、叫ぶ。艦長がそれに構わず話をしようとする、そこらにあつた敵のチェコ機銃を拾つてきて、やにわに射ちはじめた。そして艦長に向かつて、

「あなた達は戦友をやられていないから、そんなに呑気にしていられる。我々は皆戦友を失つてきたんですよ」

と、怒髪天を衝く形相であつた。

敵の反撃も受けず、選り好みしながら射ちまくつてきた我々と、喰うか喰われるかの血みどろの戦闘を続けてきた陸上部隊とは違うもんだなあ、と申し訳ないような気がした。海戦がいつもこう楽だとは言えないが、敵を間近に見ないので、敵愾心が陸戦の者より薄いよ

うに思えた。

(『敵本戦史』)

橋本氏は後に潜水艦勤務となり、昭和二十年太平洋上において米重巡インディアナポリスを撃沈した潜水艦の艦長として知られている。同重巡は、原爆をサイパン島まで搬送して帰るその途中だったのである。

六 戦場の実態

こうして、南京城の北、下関シヤウカンでの戦闘は終った。日暮れ近くになったこの江岸一帯は、まさに死屍累々るいるいたるものであつた。その数およそ二千余。一口に二千と言うが、これはやはり大変な数である。

とにかく、この凄惨せいさんな追撃戦をもつて、南京攻略作戦は終りを遂げたのだが、この追撃戦の指揮官、佐々木到一旅団長は、こうしめくくつている。

我支隊の軽装甲車が最初に下関へ進出して、完全に敵の背後を絶ち、また我歩兵は北面の城門全部を占領封鎖して敵を袋のねずみとし、少し遅れて第六師団の一部が南方より江岸に進出し、海軍第十一戦隊が溯航そこうして流下する敵の舟筏しゅうばつを掃射しつつ下関に到着し、国崎支隊は午後四時対岸浦口に到着した。その他城壁に向かった部隊は城内を掃討しつつある。実に理想的な包圍殲滅せんめつ戦を演じているのであつた。

掃討を終つて背後を安全にし、部隊をまとめつつ前進和平門にいたる。その後続々投降し来り数千に達す。激昂せる兵は上官の制止をきかばこそ片はしより殺戮する。多数戦友の流血と、十日間の辛惨をかえりみれば、兵隊ならずとも「皆やつてしまえ」と言いたくなる。

〔佐々木到一私記抄〕より〕

まさに、壮絶としか言いようがない。だがこれが、偽らざる戦場の実態なのである。しかしこれは、あくまでも五十年前のことであつて、それを今日的な観点で捉えていくことは適切ではない。

包圍殲滅することが、野戦での理想的な勝利とされ、どの国の陸軍でもその戦略研究をしてきた時代である。だが今日では、一兵も余さず包圍殲滅するなど、およそ非人道的だとされる。それだけ、時代は半世紀の間に大きく変つたのである。

それと、戦場においては、敵への憎しみがいかに強烈であるか、ということ、これを見逃しては論議は的はずれとなる。親しい戦友を殺され、敬愛する上官を殺され、そしてなおかつ自分をも殺そうとした敵、その敵への憎悪は、およそ尋常一様のものではない。これは、平時にはとても理解できぬものだ。

南京戦終了の直後のことだが、こんなことがあつたのである。城内に急造した野戦病院でのこ

とである。身動きもならぬ重傷の兵士が窓外を通る捕虜の列を眼にすると、いきなり身を起こし、よろよろと外へ出ていった。そして、近くにいた兵士に、

「おい、そのごぼう剣を貸せ」

と、怒鳴った。その兵士は意を察し、

「駄目だ。我慢しろ」

と、言い返した。だが兵士は承知せず、相手にすがりつき、

「頼む、貸してくれ」

と、何度も叫びながら、ついには泣き崩れてしまった。剣を貸さなかったその兵士も、結局は同じ思いだったのだが、それをじつと押さえていただけだったのである。

まして激戦中に、いきなり両手を挙げて出てきたとて、それを容認しないというのも、無理はない。それだけ激烈なる戦闘をくり返してきたということだが、シャーカン下関へ突入した津の三十三聯隊などは、出征時の中隊長は一人も残っていないという有様で、中隊員も半減している。こうしたことは、どの部隊も大同小異だが、これだけ苛酷な戦場を生き抜いてくれば、人間誰しも敵を見れば、

「怒髪天を衝く形相」

にも、なろうというものだ。同じシャーカン下関に在り、累々たる屍体を前にしても、また同じ軍人で

あり、同じ人間でありながら、二人の海軍士官と、突っこんできた小隊長とでは、あれだけ心境に開きがでるのだ。また同じ陸軍部隊の中にあつても、第一線にいる者と後方とでは、戦場にしたる認識が違つてゐる。

「後方の人間に何が分るか」

という声が、第一線の将兵から出るのも珍しくはない。確かに、

「敵が憎くなくて、戦闘ができるか」

という激情も、本音と受け止めることができる。しかしそれが今日ともなると、こうしたことは無視され、この追撃戦までを残酷行為とする論が出てくるのだが、そうした論議はあまりにも短絡な、そして安易な論だと言わざるをえない。

この十六師団には、作家の石川達三氏も従軍していたが、その体験をそのまま小説にしたのが『生きてゐる兵隊』であつた。しかし翌昭和十三年発売と同時に、発禁となつてしまつた。残酷な印象が強すぎるというのだが、戦う兵士の心情がよく描かれている一節があるので少し長いを紹介しておこう。

なお石川達三氏は、南京陥落後一週間ほどして市内へ入つてゐるが、虐殺の痕跡すら見られなかつたといひ、もしあつたとすれば片付けは一週間くらいでは終らぬはずだと言われている。

町はづれに幾つも敵のトーチカがあった。掃蕩そうとうしつくしてその辺には昨夜は歩哨が立っていた。朝になってから北島中隊の兵の一人が行軍の前にまづ用を足しておかうと思ひ、トーチカの穴の中でやるつもりで紙を片手にもって穴をのぞいて見た。突然彼は暗い中から拳銃の射撃をうけて倒れ、そのまま穴の中に引きずりこまれてしまった。

この知らせを聞いたとき笠原伍長はばくりと口を開けた。それが彼の何とも名状しがたい憤激の表情であつた。

「ようし、機関銃もつて来！」

そう叫ぶなり彼は刀を握つて走りだした。

トーチカは畠の中の一またぎほどの川岸に丸く盛り上っていて、そのあたりには五つ六つの支那兵の死体が転がっていた。あるものは昨夜のうちに飢えた犬に食はれたと見えて尻の肉が半分ばかりもなくなり大腿骨が見えていた。二人の兵が畑の中に銃をかまえて伏していた。

そこまで走つて来て彼は立ち止つた。畜生！ ちょっと手の下しやうがなかつた。軽機をかかへた兵が四五人彼のうしろに腹這ひになつたが、そこから撃つて見ても何とも仕様がなかつた。

「おい」と笠原はふり向いて部下に言った。「発煙筒をもつて来う。三つ四つもつて来るん

だ。早く！」

二人の兵は野菜畑の土を後に蹴上げながら腰をかがめて走って行った。彼等が戻って来るまでのあひだ、笠原は歯ぎしりして畜生め、畜生めと唸うなっていた。やがて発煙筒は穴の中へ投げこまれた。両側の入口からむくむくと煙が出て来た。笠原は兵を押しつけて軽機の台尻をかかへこみ、ぴたりと畦あぜの泥に寝そべった。

暫らくすると、青服に着ぶくれた支那軍の正規兵がひとり煙の中からとび出して、頭を両手でかかへて走りだした。方角も何もあつたものではない。ただ真一文字に走りだしたのであつた。だだだだ……

と彼の機銃は大地を慄ふるはせて鳴った。

「二匹！」と笠原は怒鳴った。

次に二人つづいて同じやうにとび出した。

「二匹、三匹！」

再び機銃は菱形の炎を吐いて鳴った。

さうして彼はつひに十一匹まで数へると立ち上って歩きだした。

穴の口まで来ると彼はざばりと太刀を抜いて、まだくすぶっている煙の下をくぐりながら這ひこんだ。三人の兵がそれにつづいた。

間もなく笠原が出て来、その後から兵隊たちは死んだ戦友の屍を抱いて出て来た。彼のからだは十一人の敵兵のためにずたずたに切りさいなまれていた。屍体は静かに畠の畝の上に横たへられた。

「気をつけ！」と笠原は怒鳴った。兵たちは各々の立っている場所で両足の踵を並べた。

「敬礼！」

さう言つた彼の声は喉につかへてかすれていた。彼は刀を顔の前にかざし、次に右下に下げた。彼の両眼は涙でびしょぬれになっていた。小銃をもたない部下の兵たちは腕を張つて挙手の礼をしたままいつまでも手をおろさなかつた。

「みんなしてかかへて行け」

伍長は部下にさう命じて凍水をすすりながら歩きだし、恰度彼の足もとにころがつていた第八匹目の支那兵の顎のあたりをしたたかに蹴とばした。(石川達三著『生きてゐる兵隊』)

憎悪むき出しの殺し合い、それが戦場というものだということを、これらでもよく感得されるのだが、それだけにいつの時代でも、またどこの戦場でも結局は同じことになる。

第二次大戦中の米軍とて、そうであつた。

「わが海兵隊は、この島の日本軍の降伏をめつたに受けつけなかった。戦闘は激しいもので、わが軍兵士の損失も甚大だった。それゆえ、みなのだんころは日本兵はすべて殺害してしまつて、けつして捕虜にはせぬ、ということだった。たとえ捕虜として連行してきたときでも、彼らを一列に並べせ、誰か英語を話せるものはいないかと質問し、もし話せるものがいたら彼らだけひきぬいて、尋問のための捕虜とした。残りの者は捕虜にもしなかつた」

(渡部昇一著『日本史から見た日本人』)

これはリンドバークの戦時日記の一節だが、渡部氏が田上憲治氏の著書の中から引用していたのを、ここでも借用したものである。

リンドバークと言へば、「翼よあれが巴里の灯だ」という映画を想い出す人も多かるうが、初めて単独で、大西洋の横断飛行をした、空の英雄であることはよく知られているところだ。

そのリンドバークの従軍記が、はからずもこうした戦場の一面を物語っているのだが、南の孤島が次々と玉砕していったその陰には、こうした事実が秘められていたのである。さらには、日本兵の死体は爆弾の穴などに放り込み、そこがそのままごみ捨て場になつていたことまで記されている。もちろん米豪軍の戦死者は鄭重に葬られ、十字架が立てられていったというのだ。

また比島方面でも、こんな例も残されている。残留邦人が避難の途中、船が撃沈された。

「さらに魚雷艇は、洋上に漂う老幼婦女子に機銃掃射を反復し、生き残った者はわずかに重傷を負った尾崎治郎一名のみであった」
(吉村昭著『海軍乙事件』)

これらを思えば、戦後日本が追及される人道上の罪なるものも、いかに空しい論であるかを思い知らされるのだが、同時に戦争そのものが非道なのだということを思わざるをえない。

こうして南京攻略戦は、城内の掃討を残し終了したのだが、十六師団が担当した広大な地域には、どこも夥しい戦死体が残った。下関の二千を筆頭に、仙鶴門鎮の数百、そして紫金山など正確な数をあげることは不可能だが、とにかくどこも惨たる状況であったことは確かである。

だが軍とすれば、これも戦果になるのだから、勢いその数は大となる。佐々木私記抄にしても、各聯隊の戦闘詳報にしても、その何倍かの数になっているのだが、それをそのまま信あるものとするわけにはいかない。これは誰しもが承知している、いわば常識である。

また捕虜とてそうだが、下関での捕虜は五千ほどで、この集団は第六師団の成友少佐が釈放した捕虜集団のことだが、互いに自軍の戦果として記録するから、うっかりすると重複し倍になっ

てしまう。それに、数そのものも多くなっている。

それらはともかく、こうして十六師団の戦闘経過を追ってきたのだが、ここにおいても言われよう大な虐殺などは、その気配すら見ることはできない。いやそれどころか、必死に戦うのが精一杯でそんなことは考える余裕すらない、というのが実情なのである。

悪名高き中島師団、などといまだに指弾のむきがある十六師団ではあるが、実際にその戦闘経過を追っていけば、どの聯隊もそのような悪事を働く余力もなければ暇もない。にもかかわらず、中国側は戦後東京裁判が始まると、この地域、特に北の平野部において、

「軍民の老若男女五万七千四百十八人を虐殺した」

との主張を出してきたのである。だがこれも、いったい何を根拠にしているのか、どうやってそこまで正確に数をかぞえたのか、その裏付けはまったくない。強いて言えば、あの夥しい戦死おびただ体だということになるが、第六師団の場合と同様、とても理ある主張となりえないのは明白である。

とにかくここまでの間、揚子江岸一帯において十六師団の区域内では、どう調べても不審、不法なものではでてこない。

それどころか、その北部地域、揚子江岸の宝塔橋という街ではこんなことすらあったのである。

ここには二万ほどの住民がいたのだが、数千の難民もここに避難していた。ところが中国兵がそこへ雪崩^{なだれ}こみ、掠奪^{りやくだつ}暴行のかぎりを尽し、市民や難民の被害は甚大なものであった。

そこへ十二月十四日、つまり佐々木旅団が下関へ突入した翌日だが、砲艦比良の乗組員が上陸したのである。治安は、たちまちにして回復した。市民は喜び、平和が戻った故に誰言うことなく平和街と呼ぶようになったのだが、以後それがこの街の名称にまでなってしまう。

砲艦比良の艦長、土井申二中佐は食糧が不足しているのを見るや、あるだけの食糧を市民に提供したが、とてもその不足を補えるものではない。その時たまたま触雷した掃海艇の死傷者を後送するため、上海に赴いたのだが、そこで土井中佐は第三艦隊の旗艦^{いすも}出雲の司令部にいき、市民や難民の窮状を訴えたのである。

その熱意がとおり、司令部も相当量の食糧を放出してくれたのだが、中佐はそれを積んで急ぎ平和街にもどるや、市民や難民たちに分け与えたのであった。彼らは狂喜してそれを受けた。こうして乗組員と市民の交流は深まったのだが、やがて市民の代表らが保国寺という寺に集まり、砲艦比良に感謝状を贈るといふ、麗しい光景まで出現した。

その土井申二氏は、すでに故人となられたが阿羅健一氏の質問に、

「あの付近では、いまわしい事件などまったく起きていない」

と、明言しておられる。というのは、中国側の主張では宝塔橋のすぐ近くにある煤炭港でも、

数万の一般市民虐殺があつたとし、その光景を巨大な塑像として南京の虐殺記念館に飾っているのである。また例によつて奇妙な証言も様々でているのだが、こんなことも、当時の宝塔橋街の住民はまだまだ生存者がいるのだから、その人々に聞いてみれば、すぐ判然とすることであろうに。

第五章 山田旅団と捕虜の暴動

一 幕府山砲台の攻略

十三師団は、新潟と福島を中心とした召集兵で編成された、特設の予備師団であった。それだけに平均年齢も、他の現役師団に比べるとかなり高かった。

その編制は、次のとおりである。

第十三師団 師団長 荻洲立兵中将

歩兵第二十六旅団 沼田徳重少将 越後高田 歩兵第五十八聯隊

新発田 歩兵第百十六聯隊

歩兵第百参 旅団 山田梅二少将 会津若松 歩兵第六十五聯隊

仙台 歩兵第百四 聯隊

師団は激しい上海戦から追撃戦へと移り、鎮江まできたところで、主力は揚子江を渡河し北側の備えに廻った。だが山田旅団だけは南京攻略戦に参加すべく、そのまま江岸を西へ進撃してきただけであった。

とはいえ、その兵力は会津若松六十五聯隊と、山砲一個大隊、工兵一中隊であり、通常のほぼ半分の兵力でしかない。しかも聯隊は、会津若松を出た時には三千六百余であったのが、南京城を目前にした今、その数わずかに千五百足らずとなっていた。上海戦以来の損耗がいかに激しかったかが分るうというものである。

十二月十四日未明、山田旅団長は聯隊長の兩角業作大佐に、幕府山砲台の占領を命じた。

すでに紫金山、雨花台の兩要衝も陥ち、各部隊は一斉に城内に突入していた。また前日には、麾下の田山大隊が烏龍山砲台を攻略している。

残るは北の要塞である、この幕府山砲台のみとなっていた。しかもここは旅団の進撃路にあるとあれば、なんとしても旅団の手によって奪取しなければ、面目がたたぬ。旅団長山田榊二少將は、その思いが強かった。また事実そうあらねば、その責も果たせぬことになる。

だが、この命を受けた聯隊長兩角大佐は苦慮していた。南京戦は終局を迎えたとはいえ、いまだに、自軍の正面には敵の大軍がひしめいている。ちょうどこの頃、すぐ南の仙鶴門鎮でも、集騎兵隊が大軍を相手に激戦を交えていたのであった。

正面の敵はいずれも城内から脱出してきた、いわば敗走の兵ではあったが、いまだ戦力は保持しているとみななければならなかった。正面に大軍がいなければ幕府山へ全力であたることもでき

るが、この状況ではそれが許されぬ。しかも兵力は僅少で、わずか千五百足らずというありさまであった。

結局、両角大佐は幕府山砲台の占領を、角田中隊に任せることにした。全面の大軍に対するには総兵力をあてても足りぬくらいであったし、これ以上の兵力は割けなかつたからである。だがこれは、もはや命令とはいいがたく、角田栄一少尉への頼みでもあつた。

それは、手兵わずか百二十名というこの中隊にとつて幕府山攻撃は、あまりにも酷な任務だつたからである。典型的な野戦指揮官型の軍人であつた両角大佐ならではの一つの賭けであつた。

角田中隊は主力から別れ、四時前、いく分針路を北寄りにとりながら、幕府山へと向かつた。時折雲間から月が出ると、遙か遠くに小高い幕府山の姿が、黒々とその輪郭りんかくを現してくれる。それを頼りに、中隊は幾つかの村落をひそかに進んでいった。

そして、幕府山のすぐ近くまで来た時であつた。角田少尉は、思わず立ち止まつた。静けさに包まれた闇の中に、何か異様な気配を感じとつたからである。耳を澄ますと、前方から地響きのようなものが、あるいは大地の唸りうなりともいうか、不気味な震動が伝わってきたのである。

「敵だ！」

と、少尉は直感した。それも大軍であつた。中隊の兵力を改めて把握した少尉は、近くにあつ

た土手でその敵を迎え討つことにした。部下を土手の陰に隠した少尉は、自分も腰を下ろすと、中隊全滅の光景が^{まぶた}瞼に浮かんだのであった。所詮、手勢は百二十人しかいないのである。ただ、聯隊長がつけてくれた小野少尉の機関銃小隊が、今はことのほか有難く感ずる。

敵は、刻々と近づいてくる。広い原野を蟻の大群が埋めつくすように、ひたひたと押し寄せてくるのであった。彼らは南京城を脱出し、揚子江の渡河をあきらめ、東へと反転してきたのである。今、その大軍とぶつかってしまったのである。

微かな月明りの中にその敵影を見出した角田少尉は、足が小刻みに震えてくるのを、どうすることもできなかつた。震えを止めようと、踏んばってみたが、何としても止まらない。その時、そつと近づく者があつた。菅野浅吉曹長であつた。

「中隊長殿、ここで死にましようや」

気楽に声をかけた、そんな感じであつた。その言葉に、ふつと角田少尉は落ち着きを取り戻したのである。すると、手が自然に物入れにいった。そして、煙草をとりだした。敵前での喫煙などもつてのほかであつたが、そんなことはもうどうでもよかつたのである。

角田栄一氏 六十五聯隊中隊長代理

あの日のことは忘れられない。細い月が出ており、その月明りの中にもものすごい大軍の黒

い影が。私はすぐ、

「戦闘になったら全滅だな」

と、感じた。どうせ死ぬならと度胸をきめ、道路に座って煙草に火をつけた。近づいたら、大暴れするだけだと思つたからです。くそ度胸というものでした。ところが、近づいてきた彼らに機関銃を発射したとたん、皆手を挙げて降参してしまつた。すでに彼らは、戦意を失つていたのです。

（福島民友新聞『ふくしま戦争と人間』より）

彼らはいっせいに銃を捨てると、わずか百二十名の角田中隊へと降伏していった。中隊の将兵は、彼らの捨てた銃をクリークへ投げこんだり、石に叩きつけてへし折つていった。だが、その数はあまりにも多く、とてもすべてには手が廻りかねた。

そして、夜が明けたのである。周囲が明るくなると、中隊の将兵は改めて投降兵の数の多さに、一驚したのであつた。いったいどこから湧いてきたのかと思うほどで、彼らの遺棄した小銃や弾薬入れ、そして鉄兜^{てつかぶと}などで、あたり一面足の踏み場もないありさまであつた。

その数、およそ三千。中隊に三十倍もの大量な投降兵であつた。角田少尉は、要らざる戦果に困惑した。確かに捕虜も戦果のうちには違いないが、今は彼らに関わりあつてゐる暇などない。さりとて、このまま放置すれば聯隊主力の正面にある大軍と、合流する可能性もある。

突然、陽光に輝く幕府山の上から、すさまじい砲声とどろが轟いた。山上の要塞砲が、火をふいたのである。この幕府山砲台には、眼下の揚子江を溯航そくかうしてくる敵艦に備え、巨大な要塞砲が据えられていた。いうなれば、南京城北の守りだったのだが、それだけに大小の砲座、銃座が百余りという近代的な砲台だったのである。これを沈黙させなければ、友軍に多数の死傷がでる。

角田少尉は、瞬時に決断した。捕虜にその場を動かぬよう命ずると、中隊をまとめただけに出發した。しかし、堅固な要塞にたてこもる彼らは、中国軍の最精鋭、教導総隊であるだけに、その抵抗も熾烈を極めた。中隊にも、次々と戦死者がでた。

だが砲台によじ登り、銃眼から手榴弾を投げこんでは、一つ一つと潰していった。そして激闘の末、午前十時によく全山を制圧したのであった。無謀とも思える攻撃であったが、犠牲は意外に少なく中隊の戦死者は六名、いずれも福島市周辺出身の兵士ばかりであった。

一方聯隊主力の正面にあった大軍も、角田中隊とまったく同じ状況となり、そのことごとくが戦わずして降伏した。その数実に一万余、これまた十倍もの大量投降兵である。そして角田中隊へのそれと合わせると、両角部隊の得た捕虜総数は、何と一万五千にもおよぶという空前のものとなった。

山田旅団長は、これら大量の捕虜を幕府山のすぐ麓に集めた。しかし調べてみると、難民が

なり混じっていることが判明した。おそらく、軍とともに城内から脱出してきたのであろう。もちろん彼らは捕虜の対象とはならない。ただちに釈放されたのであった。

そして残った捕虜は八千。これでも南京攻略戦における、最大の捕虜集団であった。それだけに、彼らの命運が後々まで、さまざまな憶測を呼ぶことになるのであった。

この八千という数については、旅団長の山田少将自ら、聯隊長の両角大佐とともに、はっきりと確認している。とはいえ、一人一人数えたわけでもないし、点呼をとったわけでもない。したがって、いかに習熟した人間とて、それなりの誤差というものはあるのが当然である。

だが、後に発表された中国側の戦闘詳報によれば、この時の捕虜は揚子江南岸にとり残された七十八軍のほぼ半数、それに、守備軍の直属部隊や憲兵などであったというが、その数から逆算しても、山田旅団長と両角大佐の判断した八千という数は、きわめて正確なものだったということになる。

しかし、旅団長や聯隊長の困惑ぶりは並たいていのものではなかった。とにかく八千の捕虜を、幕府山の麓にあった五棟の廠舎しょうしゃに收容したのである。それは、その周囲が簡単な竹矢来やぶきのようなもので囲ってあり、收容にはきわめて適していたからである。この廠舎というのは、付近一帯が演習地でもあったため、演習の部隊が使う宿舎だったのである。

もちろん、すべてが、建物の中に入れるわけもないが、幸い彼らは一枚ずつ毛布を背負ってい

る。それに、これだけ多数の人間が一ヶ所に詰めこまれると、冬の野外でも互いの人いきれで、たとえ屋根はなくとも、それなりに寒さをしのげるのであった。

だが、困ったのは食糧である。そうでなくとも補給はままならず、旅団の将兵自身が食糧不足に悩まされてきただけに、その上八千もの捕虜に与える食糧などあろうはずがない。いや食糧どころか、満足な飲み水すらことかく始末だったのである。

だが、これも幸いなことには、幕府山砲台には地下に食糧庫があり、そこに米が備蓄されていた。将兵らはこれを馬で運び、彼らのために炊飯の用意をした。百人分くらいが炊ける、大きな野戦釜もあった。それで粥を作っては、順次彼らに食べさせていったのである。食器も、砲台から運んだ支那^{どんがり}井が役にたった。

しかし、使役にあてられた兵の中には、

「殺してもあき足らぬ奴らに、何で飯までださなきゃならないんだ。第一こつちだつて疲れきってるんだ」

と、いきまく兵も二、三ではなかった。多くの戦友を殺された恨みなどというものは、たとえ降伏してきたからといって、そう急に薄らぐものではない。その恨みでも余りある敵のために、疲れた体で粥を作るといふのだから、兵士たちが怒るのも無理はなかったのである。

しかし、捕虜の警備を命ぜられた、第一大隊長の田山芳雄少佐は、その心情を充分解しながら

も、それをたしなめていった。田山少佐は、この後砲弾で右腕を失うという重傷を負うが、それでもなおかつ敵への憎しみは抱かなかつたという。いや、憎しみを表にださなかつたというべきか。これも、一つの武士道であつた。

一方山田少将と両角大佐は、今後の処置について協議していた。同じ上海派遣軍の京都十六師団では、当初から捕虜はとらぬという方針をもっていたことはすでに述べたが、実際、上海から南京までは激しい追撃につぐ追撃で、捕虜などに構っている暇などない。そんなことをしては、自軍が危うくなる。それに、捕虜とはいえ彼らはもともと農民なのだから、

「たとえ遠くとも、釈放すれば歩いて故郷へ帰れる。」

という参謀の言も、説得力がある。中国は大陸で地続きなのだから、確かにそのとおりなのだ。しかしこれには、反対の意見もあつた。釈放した捕虜が、言いふくめたとおり皆がそのまま帰郷するという保証は、まったくないからである。いつ彼らが、便衣兵となつて襲いかかつてくるかわからない。実際その例は、満洲事変以来、経験済みだったのである。

また南京戦においてもその事例があり、釈放に反対する参謀の意見も、ただの杞憂きゆうとはいいがたい。確かに、捕虜の釈放には、いつこつちが殺やられるかわからない、という恐怖がつきまとう。

だがその危険を承知のうえで、十六師団ではあえて釈放の方針を打ちだしたのである。

それがいつの間にか、処断命令という形になつてしまつたのだが、ここ山田支隊においても同

じような問題が生じたのである。山田旅団長のところへ処断命令が届いたことは、二十年前に、『南京大虐殺のまぼろし』の著者鈴木明氏が直接山田梅二氏せんじに取材されているが、その命令を誰が発したのか、ここでもそれが判然としないのである。しかし、

「それは長勇参謀だ」

との声は、十六師団の時と同様随所で聞かれる。だがその一方で、

「参謀は、幕僚として命令の起案執筆はするが、参謀自体に命令権はない」

という、正論も聞かれる。つまり、そうではないということだ。ただこれも、この時はともかく後年には一部参謀が作戦指導と称し、軍や師団を動かしていったのも事実である。

しかし、長参謀に仕えた大西参謀は、

「処断命令など、絶対に出ていません」

と、明言する。これも大分以前だが、阿羅健一氏が大西氏から直接聞いておられる。だがそれでも、長参謀の名はここから消えないのである。余程、その噂にふさわ相応しい人物であったということなのか。

長勇中佐は、もともと皇道派の将校であり、頭山満に私淑していたところから、話題の多い人物であったことは確かなようだ。だが、それだけに承詔必謹、つまり天皇のお言葉には絶対服従という姿勢は徹底していたという。

これは軍人として当然のことではあるが、長中佐の場合はそれが徹底し、人生観にまでなっていたと見られる。したがって、天皇親補である軍司令官の意向にたいしても徹底服従の姿勢であり、そうしたことからしても、松井司令官の意向をよく知る長参謀が、それに背いてまで処断命令を出すとは考えにくい。それに、長参謀は情報参謀であり、作戦参謀ではなかったということもある。

ただ、長中佐は酒が好きで、酔えば多少大言壮語ぎみになるところからして、

「捕虜なんか、皆殺^やつちまえ」

くらいのことは、言ったかもしれぬ。捕虜の処遇に苦慮していた時だけに、司令部内でこういう怒鳴り声でも聞こえたりすれば、それが噂となつて広まるくらいのはあつたかもしれない。そうでなくてさえ、声が大いのであるから。

長中佐は、後に中将となり沖繩戦の参謀長として戦死する。

それらはともかく、いざ釈放となると、八千という人数はあまりにも多すぎた。敵の一ヶ師団を野放しにするようなもので、確かに危険きわまりない。

そうした危^{きぐ}惧を抱きながら、山田旅団長たちは、捕虜釈放の策を練っていたのだが、その夜、収容所の中で捕虜どうしの争いと出火騒ぎが起きた。狭い中に詰めこまれているだけに、食事や

水の奪いあいから始まって、彼らの中では喧嘩は絶えなかつたのだが、この夜の騒ぎはなかなかおさまらず、ついには收容所全体が蜂の巣をつついたような大騒ぎとなった。

そしてその間隙をつき、矢来を破つて脱走する者まであらわれたのである。警備は手薄であるし、收容所全体を完全に包囲しているわけでもない。だから、その気になれば闇にまぎれて逃げることが充分可能だったわけである。

そして朝になったら、捕虜は何と半分ほどに減っていたのである。だがこれは、旅団にとってはむしろ荷が軽くなつたわけで、それ自体別に問題はない。

十二月十六日、山田旅団に新しい命令が届いた。それは、

「十九日に、浦口に移動せよ」

というもので、南京攻略戦の終了にともない、早くもその事後処置がとられていたのであつた。浦口というのは、下関シヤカンの対岸にある街で、下関と浦口の間は鉄道連絡船で結ばれていた。日本の青函連絡船のようなものだが、現在では巨大な南京大橋がかかり、あつという間に揚子江を渡ってしまうが、当時は揚子江には橋というのは一つもなかつたのである。

浦口への移動は、揚子江北岸の敵に備えていた師団主力との合流という含みあつてのことで、移動ともなれば、捕虜の処置も急がねばならない。そこで、思案の結果出された結論は、

「小舟で中洲へ渡し、そこで全員釈放しよう」

と、いうものであった。揚子江には随所に中洲があったが、幕府山のすぐ対岸にも八封洲、またの名を草鞋洲ともいったのだが、そこへ捕虜の全員を渡してしまおうというのであった。八封洲は、中洲とはいっても大きい。

南京城内より広いくらいで、とても中洲とは思えぬほどであった。だがそこなら、当面反抗が起きる心配はないし、また彼ら自身の安全も保てる。まあ、互いに手の届かぬところへ置いておこうというのだが、実際それ以外に安全策はなかったのである。

そして、この件に関しては、師団司令部にも報告され、作戦主任参謀吉原矩大佐から参謀長、師団長にも伝えられ、事前にこれを了承していたといわれる。

十二月十七日、この日は午後から南京入城式が行なわれた、記念すべき日であった。山田旅団も山田梅二少将、両角業作大佐をはじめ、各隊から選抜された集成一ヶ中隊がこれに参加した。軍司令官、松井石根大将の入城から始まる、この厳粛な儀式が行なわれている頃、両角部隊の一部百三十五名の将兵は、捕虜をすべて八封洲へ移送するという、まことに困難で、危険な任務にとりくんでいた。

前夜の騒ぎで半数が逃げ去ったとはいえ、いまだ四千という大量の捕虜であることには変わり

がない。それを全員岸辺まで連れていき、そこからさらに小舟に乗せて、次々と中洲へ渡さねばならないのである。収容所での監視も大変であったが、移動ともなれば、その危険度はさらに増す。なにしろ警備陣の四十倍という捕虜なのである。

戦場というのは、要するに殺し合いの場であり、いかにそれが苛酷なものであるか、南京戦に参加した人々から、さまざま話を聞いたが、最後には、

「それは、話にも何にもなりませんよ」

と、いうことになる。経験しない人間には分らない、という意味と、口では言いようもないのだ、との二重の意味がこめられているのだが、さもありませんというのが実感でもあった。ちよつとした油断で、いつ命を落とすか分らないのである。

捕虜の移送ということが、いかに危険な任務であるか、これも平和な時代には想像はつきにくい。その上、捕虜である彼らのほうも恐ろしいのである。

「移動と称して、殺されるのではないか」

という疑念を、常に抱いている。したがってそれだけ反撃してくる可能性も高い。どうせ殺られるなら、と捨て身になつてかかってくることもあるからだ。しかも悪いことには、互いに言葉が通じない。通訳をとおして、伝えたはずでも、その意がよく伝達されていないこともある。

互いに疑心暗鬼、そして極度の緊張という状況の中で、四列に並んだ捕虜の列が延々と続いた。

さして広くもない道は、時折四列では通れぬほど狭くなったが、そんなことも不安定要因をかきたてる一つとなった。

道は、右手が切りたつた崖がけが続き、その上には監視する日本兵の姿が見られた。また左側は荒涼たる原野が一面に広がり、その向こうが揚子江だったのである。

列の両側には、警護の日本兵が銃を持し、ほぼ五十メートルに一人くらいの割りあいについていた。わずか数キロの移動ではあったが、警護する兵士たちにとつても、また送られる捕虜にとつても、ともに瞬時も気の許せぬ、緊迫した道行きであった。まさに一触即発、いつ何が起こるか分らない。

長い列の中から、一人の捕虜が突然飛び出した。だが、いくらも走らぬうちに銃声が響いた。頭から血をふきながら、捕虜はぼつたりと倒れた。捕虜の逃亡は、銃殺されてもやむをえない。放つておけば、大混乱が生ずるからだ。その捕虜は、水を飲みたくて小川のほうに走っただけかもしれない。だが、結局は同じことだったのである。

こうして、とにもかくにも移動を終え、四千の捕虜が予定の岸边に集結しえたのであった。背後を振り返ると、遠く黒煙が天に沖ちゅうしている。それは、彼ら捕虜の遺棄いっきした武器弾薬を焼却する煙だったのである。

出発に先だち、小銃から機関銃、さらには擲弾筒てきだんとうからモーゼル拳銃など、あらゆる武器や弾薬

を山と積みあげ、石油をかけて遠くからこれに点火し、いっさいを焼き払ったのである。それらは次々と誘爆し、辺りにすさまじい轟音と黒煙とをもたらした。それがなお黒煙をふきあげているのであった。

八封洲をすぐ対岸に望むその岸边には、すでに幾隻かの小舟が用意されていた。小舟とはいっても、揚子江のそれは数十人が乗れるという、妙に細長い舟で、木造ながら日本にある和船とはだいぶ趣おもむきが違ふ。これらの手配は、機関銃中隊の箭内淳三郎准尉たちによつて整えられていたのであった。

だが、冬の陽は落ちるのが早い。四千の捕虜がすべて江岸に集結しえた時には、早くも辺りには夕闇が迫りつつあった。その中にただ立ちつくす捕虜の大群、それを監視する田山大隊百三十名の将兵。互いに不安をそつとおさえて、両者は対峙たいじしていた。

「また騒動でも起こつて、大挙してやつて来られたら、こつちが殺られる」

大隊の将兵は、誰もがそう思った。警備の人数が少ないのだ。しかも、乗船のほうは思うにまかせぬ。それでも、ようやく乗り終えた舟が数隻、岸边を離れ八封洲へと漕ぎ出したのである。暗い河の中を、舟はゆつくりと進んでいった。

ちようど中ほどまで、舟がいった時であった。静かな江上に、突如、銃声が響きわたった。対岸の八封洲には、すでに中国兵がいたのである。彼らは、小舟を日本軍の渡河と思ひ発砲してき

たのであつた。

その状況を、把握できる場にいた者には、瞬時にそのことが理解できた。だが、それ以外の者には日中両軍とも状況がよくつかめない。ただ暗夜をつんざく銃声のみが、彼らを驚かせた。

「やはり、ここで殺すのだ」

と、勘違いしたか、四千の捕虜はいっせいにざわめきだした。と、

「相馬少尉が殺られた」

という絶叫が聞こえるのと、彼らが押しよせるのが、ほぼ同時であつた。捕虜の大群が雪崩なだれをうって向かってきたのである。

その時、機関銃が唸りだした。周囲に配置してあつた六挺の重機関銃が、いっせいに火をふいたのである。喊声かんせいをあげて迫る四千の捕虜。平林少尉も日本刀をふり廻し、彼らを身辺から追いはらうのがやつとであつた。

小銃を持たぬ兵たちは、腰のゴボウ剣を抜いてやたらに振り廻しては身をまもつた。全体の状況どころではない、指揮官も兵も誰もが皆、己の身をまもるのがせいっぱいであつた。

ただ狂つたように、そんな中を機銃の音が唸つた。あちこちであがる悲鳴と絶叫、彼らの走り廻る地響き、何がどうなっているのか、もう誰にも分らなかつた。ただあるのは、暗い岸辺に一つの巨大な地獄が渦巻いているだけであつた。

やがて東の空が白み、冬の弱々しい陽が江岸を照らした。するとそこには、日中両軍千余の屍体が、無惨な姿で横たわっていた。そしてそれ以外の三千の捕虜は、いったいどこへ逃げ去ったか、その姿はまったく見られなかつたのである。

もつとも周囲の葦の中には、時折彼らが身をひそめているのが散見された。だが大隊の将兵らは、誰もが気づかぬふりをしていた。今さら、射つ気にもなれなかつたからである。この時の日本側戦死者は、将校一、下士官兵八名であつた。なお相馬少尉というのは仮名で、名誉のため実名は伏せたのである。

戦いはまことに無情、だがそのきつかけは、人間のもつ恐怖心と疑心暗鬼、そしてそれに揺れ動く心が、起こさずともすむ大惨事をひき起こしてしまつたのであつた。その日大隊は、終日屍体の処理にあたらねばならなかつた。岸边に近いところは、そのまま河にも流された。

こうして、南京攻略戦における最大の捕虜集団は潰え去つた。ではこの時の屍体数は、いったいどのくらいあつたのか。

平林貞治氏 聯隊砲小隊長

時折出る淡い月が、その一面の屍体を照らしていました。まさに鬼気迫るものがあり、その印象は強烈に焼きついています。数はどうですかねえ、千か二千か、あるいは三千か、

何とも言えません。それにあの時、自分の小隊でさえ、何人連れていったのか、はっきり覚えていないくらいですから。

確かに数というものはすぐ忘れるものだし、またその把握もむづかしい。ましてこれだけの惨事である。その直後はただ茫然たる思いで見つめていたに違いない。その数がどのくらいか、などという考えは浮かびもしないであろう。まして何十年もたってから、その数を聞かれても答えようがないかもしれぬ。

ただもうその凄惨な印象だけが、生涯忘れがたいものとなって、心の中に強烈に焼きつけられている。それが当然である。

またこの翌日、片付けの始まったこの現場を、同盟通信の前田雄二氏が取材しているが、やはり千か二千という表現をしている。正確を期する習性を持っているはずの記者でさえ、結局はそうとしか言いようがなかったと思われるのだが、さもありなんという気がする。

なおあの時、対岸から発砲したのは中国兵ではなく、揚子江北岸に進出していた国崎支隊の一部ではないか、との説もある。いずれにしても戦場というのは、とにかく混沌たるもので、すべてを明らかにしようというのはまさに至難の一語に尽きる。

二 戦後の虐殺主張

「揚子江岸において、軍民十数万人を虐殺した」

これは、最近の中国側主張である。戦死体の多いところは、それがそのまま虐殺となっていることはすでに述べたが、この草鞋峽わらじの事件のように、複雑で分りにくい惨事が起き、その後千余の死体が残されたとなると、これはもう虐殺話の火種とするには格好のものとなる。またたとえ、虐殺話を創りあげようという悪意がないとしても、とかく疑念の眼をもって見られ易い事件であることは確かである。しかし真相はかくの如しで、両角部隊の将兵に虐殺の意図など毛頭見られない。

だがそれでも、虐殺を主張したい日本の一部新聞や、それに追従する人々によって、幾度もこの事件は取りあげられてきた。

「捕虜の血にまみれた白虎隊」

という記事の中で、両角部隊が二万人もの捕虜を虐殺した、とする秦賢助氏もその一人だが、

同氏は福島の人であるだけに、福島民友新聞がこれに反論、部隊の生存者に徹底した調査を行ない、事実無根であることを証明している。第一この秦氏は、南京には一度も足を踏み入れていないし、その記事のすべてが伝聞と推測によるというのだから何をか言わんやである。それらの経緯は、鈴木明氏の『南京大虐殺のまぼろし』の中に詳しく記されてもいる。また、

「両角部隊は、揚子江岸において一四、七七七名の捕虜を、一兵も余さず虐殺した」

と、いうのもある。七七名などと、端数まで記しているのが妙に印象的だが、この数字は当時の報道班員の一人が、山田旅団の戦果の一つとして、これだけの捕虜を捕えたと報じているのだが、もちろんこれは実際に数えた数字ではない。

前述のように、あくまでも一万五千という概数で把握しており、そのうち難民と分る者をすぐ釈放したので、残る捕虜は八千となった。これも、もちろん概数であり、指揮者もない烏合の衆に、点呼などとりようもないし、第一、そのような必要性がない。

ただ、これを報じた記者が妙に正確さを誇示したくなって、このような細工をしたのだろうか、読者が内地の、しかも実戦の場を知らぬ人間だからいいようなものの、戦場の実態を知る人間には、これは通用しない。戦屍体を詳細に調べた第六師団の場合は、例外中の例外と言っている。

しかし、また正確を期したいと願うのと同時に、記者の心の中にもやはり、戦果は大きいほうがいいという気持が湧くのも自然で、この点に関しては軍人も記者も同じである。だがこれも、

活字として残るだけに、後々問題を生ずることもある。

「幕府山の捕虜十萬」

などという、ひどいものもそうで、別に悪意あつてのことではないが、これもまた虐殺を主張したい人々にとってはよき攻めどころとなる。

「この十萬とある捕虜は、どこへ消えたのだ。やはり、殺したのだらう」

と、いうことになる。しかしその人々として、誇大に記された戦果、あるいは単なる表現、というくらいは承知しているにちがいない。こんなことは、一つの常識でもあるのだから。だがそれでも、なおかつそう主張する。

しかし、いかにそれらの人々が虐殺を主張しても、

「殺す気なら、何も苦勞して飯なんか食わせませんよ」

という、小隊長平林貞治氏の言葉のほうが重みがある。それに殺すなら、これも苦勞して江岸まで移動させる必要もない。広い野つ原である幕府山の麓で、充分なのである。これだけの捕虜の移送が、いかに危険で気骨のおれるものか、それを考えてみたらよい。

第一我がほうにも九名もの戦死者がでているのだ。これが戦闘であつたことの何よりの証であり、この一事をもつてしても、それ以上の説明は不要である。

さらに付け加えるなら、前記同盟通信の前田雄二、新井正義、深沢幹藏の三氏は、事件翌日の現場取材で、

「捕虜が暴動を起こし、戦闘になった」

との詳報を得ているのだ。この辺の消息は前田氏の著『戦争の流れの中に』等で詳述されていて、偶発的なものであることも明記されている。さらに同氏は、かんこうれい箱口令など出た事実はまったくないことも付言されている。にもかかわらず、

「計画的な虐殺だ」

「それを隠すため、かんこうれい箱口令を敷いた」

などと、さまざまに憶測した記事が出廻っているのだが、どうにも理解に苦しむところである。なお前田雄二氏はすでに故人になられたが、戦後も長くマスコミ界にあり、新聞協会参与、プレスセンター理事などをつとめられた、いわばマスコミ界の重鎮の一人である。そして何よりも南京攻略戦には終始第一線で取材された人である。その氏が、

「南京での一般市民虐殺など、まったくなかった。それを、さも事実であったかのように、教科書にまでのせるなど、見すごせない」

と著書にも書き、阿羅健一氏のインタビューにも、そう答えているのだ。これを否定する資格が、戦後の新聞記者諸君にあるのだろうか。戦争も知らず、現場をも知らぬ人間が、どうして先

輩の命がけの取材を否定できるのであろうか。

三 記事の捏造

会津若松六十五聯隊の將兵は、戦後復員し、郷里に健在の者千余名、このうち誰一人として南京大虐殺など、信じている者はいない。

福島民友新聞などの郷土紙もこれに深く関心を抱き、この夜の事件、ならびに南京事件について、復員の將兵らに大々的な調査をし、郷土部隊戦史にまとめているが、ここでも虐殺などという事実はまったく出てこなかった。

復員後は、ほとんど横の連絡のないこれらの人々が、それぞれ独自の立場で語っているだけに、それを総集したものに嘘はない。ただ、細部の記憶違いがあっただけなのである。もちろん箝口令など敷けるわけもないし、たとえ、もしそんなことをしたとて、守られる道理もない。

なお福島市内に住む平林貞治氏も、近くに住んでおられた中隊長代理の角田栄一氏も、すでに故人になられた。貴重な証言者が、また一人二人と減ったわけである。

貴重な証言者というのは、戦後四十数年も経ているのに、いまだに時折火のないところに、無

理やり煙をださせようという人がいるからで、そんな折、当時を知る人がおられれば、それなりに反論もできるからである。しかしその生ける証人を、またまた逆に虐殺はあつたとする証人に仕立てあげるといふ人間も現われたりするから、まったくもって油断も隙すきもあつたものではない。それは、昭和五十九年八月七日のことであつた。毎日新聞に七段抜き、写真入りといふ大きな囲み記事が載つたのである。

南京捕虜一万余人虐殺

元陸軍伍長スケッチで証言

あの島に捕虜を収容すると聞いていたのに、突然発砲命令が下つた。

四方から水平射ちで一斉射撃一時間、こうして一万余人を殺した。

後ろ手に縛られ、身動きもならぬ捕虜が、集団で暴動など起こすわけがない。

虐殺は事実。真実はきちんと後世に伝えたい。

これを読んだ人々は、誰しもが、

「ひどいことをするもんだ」

と、思うに違いない。しかも証言したといふ人の顔写真が、中央に大きくのり、住所氏名まで

記されているのだから、寸分の疑念も抱かせない。

さらには、「それまでの暴動説を否定」とあるから、今までごまかしてきたものの、やはり虐殺だったのだ、という二重の犯罪性をも感じさせる。

実は私がこの新聞記事について知ったのは、田中正明氏の『南京事件の総括』という本に書かれていたからだ、それでも簡略な記述であったから、改めてその新聞記事なるものを図書館で読み直してみたのである。

そしてさらに、新証言者という栗原利一氏を東京の郊外に訪れてみた。直接聞いてみるに如かずである。剣道七段、八十三歳という氏は、いまだ豊饒かくしやくたるものであった。その氏は、少々時がたっているにもかかわらず、いきなりこう言われた。

「あれは、ひどいもんです。あの記事を見て、吃驚びつりしたのは私のほうですよ。都合のいいところだけつまみ食いして、私をすっかり虐殺の証言者にしてしまった。あれは虐殺なんかではない、明らかに戦闘なんです。『少尉がやられた』っていう悲鳴のような声があがって、それからこっちが射ちだしたんですから。それにしてもまあ、言いもせぬことをよく平気で書くもんだ」と、吐き捨てるように、そう言われたのである。

「中国側の資料に、四十万の大虐殺なんて書いてあるので、つい反論したくなって、あの時のことを話したんだが、それが、まるで逆なことになってしまった。あんなことになるなら、言う

んではなかった」

氏が怒るのも、無理はない。

「自衛上のやむなき戦闘であった」

と話したのに、記事を見たら「意図的な虐殺」とまったく反対の話になって出てきたからである。しかも記事の中には、栗原氏から聞いた、当時の状況を知る貴重な話が織り込まれているから、いっそう真実味を帯びてくる。したがって一般の読者は、まさかそんなからくりがあるうとは気づかない。

第一、低俗な芸能誌ならいさ知らず、大新聞がそのような背信を犯すわけがない、とおおかたは信じているからでもある。もちろん栗原氏は、その記者にたいし、嚴重な抗議と善処方を申し入れた。その記事を読んだ戦友や、事情を知る人々からの問いあわせ、あるいは怒りの電話などが次々とかかってきたからでもある。

それからほぼ一月半もたった九月二十七日、毎日は「記者の目」という記事を載せた。お詫びや訂正が載っているのかと、栗原氏も期待して読んだのだが、またもや期待は裏切られた。

「匿名の中傷は卑劣だ」

と題するその記事は、これまでの定説をくつがえす勇氣ある証言者にたいし、匿名で中傷するなど卑劣だというのである。そして、あの証言記事が中国の新聞にも載り、中国側もこの記事に

強い関心を寄せている、という。言わば、あの記事は特ダネだった、と言わんばかりである。そして最後に、

「やつと明らかにした証言や資料をつぶすようなことはすべきではない。反論があるなら、堂々と名乗って筋をたててもらいたい」

と、結んでいるのである。そしてついに、栗原氏にたいする謝罪の言など一言半句も見られなかった。あくまでも、栗原氏の抗議など認めず、自分はそう聞いたのだという姿勢を崩さないのである。

ことの一部始終を聞き、私は、実に恐ろしいことだと、肌粟を生ずる思いで、栗原氏の宅を辞した。またこうした記事を捏造する人が、ことさらに「真実を後世に伝える」とか、「堂々と筋をたてて」などという言葉を使うことに、よりいっそうの嫌悪を感じたのである。こんなことが世にまかり通っていいのだろうか。

栗原氏は昔の仲間、戦友にたいし、顔むけすらできない。会う度に釈明しなければならぬし、それを信じてもらうまでには容易なことではない。それこそ人権問題でもある。

栗原氏のことは、毎日だけでは終らなかつた。さらに朝日の本多勝一記者が、同じ筆法でそれをこの九月七日、十四日の両号の朝日ジャーナルに書いていったのだが驚くべきことは、同記者

は栗原氏宅を訪れ、氏の真意に触れているのである。普通の人間であるなら、栗原氏の困惑ぶりを見たら、あるいはその怒りに触れたら、とても気の毒で書く気にはならないはずだ。

しかし、それでも本多記者は毎日と同じ筆法で、しかも現場の略図まで添え、残虐証言として書いていったのである。私には、とても信じられぬことであつた。ただそこでは、

「証言者に迷惑がかかるので、匿名とした」

とされ、栗原氏の名は出ていないが、すでに毎日を読んだ人は、また関係者はすぐ栗原氏だと分るのは当然である。むしろそうした思いやりを示すことによつて、読者により信憑性しんぴやうせいを感じさせるかもしれないのだ。

その本多記者にたいし、栗原氏は一言、

「すつかり、のせられました。第一あの人は、中国人のありもせぬ話ばかりを、証言なんていつて書いているが、少し気がおかしいんじゃないか」

これで、本多記者がどんな話をして帰つたか、おおむね見当がつく。

最近、芸能誌などではこうしたことがあるということは、ある程度一般にも知られているようだが、新聞においてこのようなことがあるとは、おそらく知らぬ人が多いのではないか。それに芸能人などの場合は、それなりに反論する場というものもあるのだが、一般大衆がそれをやられたら、反論しようにもまかつたくその機会は与えられない。

ただもう、一方的に撲なぐられ放しのようなものだ。どんなに口惜しくとも、泣き寝入りのほかないのである。これは、現在では栗原氏のような場合に限らず、些細な事柄でも案外多いと思われる。ただマスコミは己の非を報ずることはないから、分らないだけであろう。

それはともかく、何事も人間のやることであるから、聞き違いや勘違いはあるだろうが、それは訂正すれば許される。だが栗原氏の件に関しては、明らかに意図的な捏造ねつぞうであり、記事の歪曲なのである。

新聞倫理綱領には、こんなくだりがある。

「事件の真相を正確忠実に伝える。故意に真実から離れようとする論評は新聞道に反する」

とある。このように新聞道などと、ことさら求道心めいたことまで要求する気はさらさらないが、ごく当り前に、普通に報道してくればそれでいいのである。もちろん、新聞道といえるほどの格調の高さがあれば、どんなに世の幸となるかしのれないのだが。

また、こんな条項もある。

「個人の名誉は基本的人権と同じように尊重され、かつ擁護さるべきで、非難されたものには弁明の機会を与え、誤報はすみやかに取り消し、訂正しなければならぬ」

と、なっている。だがこの場合、栗原氏の名誉を毀損きそんしているだけではなく、弁明の機会とな

るべき二度目の記事にまで捏造をくり返している。しかもその捏造に真実という美名すら冠するという手のこみようなのである。この点では、都城でのことと酷似しているし、また時もほぼ同じうしている。

思うにこの新聞綱領なるものも、法と同じように最低限守らねばならない規範を、新聞人自身が自ら設定したものであろう。しかしながら、これには残念ながら罰則規定はついていないし、それを審査する機関も置かれていない。そんなことに思いが至るのは大変悲しむべきことだが、こうしたことが次々と起きてくるとなれば、それを思わずにはいられない。

つまり、この倫理綱領なるものを、そのまま罰則を付して法制化したらどうであろう。強姦罪と同じように、親告罪でもいいから、刑法の中へ組み込んでいったら、少しはこうしたことは防げらると思うが。でないと、泣き寝入りの一般大衆はいっこうに救われなし、歴史の歪曲も防止できないことになる。民事の名誉毀損などでは、金がかかるし、第一そんな暇も意欲も大衆にはないのである。

しかし、こうした憤懣かんまんやるかたない思いをさせられているのは、ひとり栗原氏だけではない。

平林氏や角田氏などの直接関係者はもとより、この作戦に参加された人々、そして都城聯隊会の場合もそうだが、

「あらぬ冤罪えんざいを着せられた」

という、無念の思いを抱いている。それはそうであろう、純粹に青春のすべてを捧げた人々にとつて、悪逆無道のかぎりをつくしたなどという言辞は、不本意なものにきまつている。それらの人々の発言を載せれば際限ないが、ここで一人だけ、前出の大西氏の言を記しておこう。

大西一氏 上海派遣軍参謀

虐殺命令など、軍命令にも師団命令にも、絶対に出していません。朝日新聞に「中国の旅」が連載された時、あまりにも当時と違うので抗議に行つて、本多勝一記者を詰問きつもんしたことがあります。

南京事件は、戦後の東京裁判ではとりあげられたが、その後話題になるようなことはなかった。

ところが、その「中国の旅」が出たところから、今度は日本人があつたといひだした。

その時、真実を知っている自分こそ、本当のことを書くべきだと思ひ、それを書こうと思つたんです。情報参謀という立場上、私がつとも詳しく知つてゐるわけですから。しかし身内の者に、

「今さら書いても遅い。言い訳がましくて世間は信用しない」

そう言われて、仕方なく止めたんです。

(阿羅健一著『日本人の見た南京陥落』)

最後に、重要な一項をつけ加えておこう。それは九師団の中隊長であった土屋正治氏宅を訪れた時に、話が山田旅団のことに及ぶと、氏は、

「この前、両角聯隊長の当時の日記が見つかったんですよ」

と、言われた。多くの遺品の中から発見されたとの由だが、筆跡鑑定までして同氏のものであることを確認したという。そして数日後には、その写しの写しを送って下さったのである。

「十七日、南京入城式参加、第一大隊は俘虜解放準備」

「十八日、俘虜脱走の現場視察」

私はこの二行を、いつまでも食い入るように見つめていた。両角聯隊長が、捕虜の釈放を第一大隊に任せ、自身は安心して入城式に参列した様子が眼に浮かぶようであった。

だが翌日は一転して脱走の惨事の現場へ行かねばならなかった。思わぬ事故に見舞われたという状況を、この二行のわずかな文字が見事に物語っているのであった。これほど虐殺を否定する確かな証拠はあるまい。

第六章 城内への突入

一　まず城壁をめぐるの攻防

中華門

城壁をめぐるの攻防はいずれも壮絶、その帰趨ききうは容易にはかりかねるものがあつた。中国軍も、またよく戦つたのである。しかし南の中華門付近で、三明中隊みんあけはついに城壁をよじ登り、日の丸を振るにいたつた。

この辺の消息は、第六師団のところですでに詳述したが、この城壁の一劃が破られたことは、中国軍に大いなる衝撃を与えたに違いない。さりとて城壁上に築かれた敵陣はいまだ堅く、城内からの増援もしきりである。とても予断は許せぬ状況であつた。この戦況をさらに展開させるには、城門を打ち破つての突入が必要だつたが、その城門は砲撃によつてもいつこうに破壊できないのであつた。

聯隊長の長谷川正憲大佐はまなじりを決し、自ら速射砲を指揮し中華門へ徹甲弾を打ちこんでいた。砲身は赤く焼け、すぐ射てなくなる。水筒の水で冷やす。また射つ。そのくり返しであつ

たが、それでも城門は頑として崩れない。

何故こうも堅固であったのか、突入は不可能なほどであったがその謎は後にとけた。それは城門は二重になっており、その間に袋に入れられた碎石が、ぎつしりと詰めこまれていたからであった。だがそれも、聯隊長の執念とも思える、数時間におよぶ速射砲攻撃によつて、ついに破壊された。

こうして夕方近く、大分四十七聯隊は城内へと突入し、中華門付近での激しい制圧戦がくり展げられていった。

城壁角の破壊口

最左翼の、城壁の西南角には、小倉の野戦重砲十三聯隊が、その十五糎榴弾砲を、釣瓶つるべ射ちに打ちこんでいた。野砲弾にはびくともしない城壁ではあつたが、この重砲弾はさすがに効果的で、一撃ごとに城壁は崩れていく。それをまた、聯隊砲が至近距離から、ならしの砲弾を打ちこんでいった。突撃時に登り易くするためだったのである。

かく砲撃一時間、ようやく突撃路は開け、都城二十三聯隊がこの破壊口をよじ登り、城壁角を占領したのであつた。

時に十二日、四時四十四分であつた。

だが冬の陽は早くも落ち、辺りは夕闇ゆふやみに包まれていたため、この日は城壁付近を確保するに止め、聯隊主力は濠の南に集結し、一夜を送ることになった。

光華門

ここには金沢第九師団の脇坂部隊、つまり鯖江さびえの三十六聯隊が、いち早く進出していた。その進出は、総攻撃の下命前日の九日であり、それだけに、いまだ健在である雨花台、紫金山の両砲台から砲弾が飛来し、正面光華門城壁上からの弾雨とともに、この聯隊を当初から苦戦に追いこんだ。

加うるに、周囲の陣から撤退した中国軍が、光華門から城内に逃げこもうと蟻集いしゅうしていた。それが予定の行動だったようで、ために扉は当初半ば開いていたのであった。そしてその彼らからも攻撃を受けることになり、よりいっそう苦境に追いこまれたのである。

まさに四面楚歌しめんそか、脇坂部隊の損害は続出した。そうした中で総攻撃下命であったが、脇坂次郎大佐は、麾下きかの山砲隊に城門の破壊を命じ、これを猛射、夕刻わずかな破壊口を認めるや、はや伊藤義光少佐の大隊に突入を命じた。十日、午後五時半のことであった。

しかし大隊は、城門にはたどり着いたものの、たちまち敵の大逆襲にあい、暗夜の中で大隊そのものが危機に陥った。さりとて脱出も不可能な状況であり、これも混戦乱戦、肉弾相うつ熾烈しれつ

な戦いとなった。

伊藤大隊長戦死、以下死傷相次ぐ悲惨な状況となつていったが、隊員は周囲に土囊どのおうを積みあげ防備とし、かろうじて持ちこたえていった。十日の夜が明け、十一日が過ぎ、そして十二日と、救援のできぬまま二日間が過ぎていったのだが、ようやくその日の午後になつて第二大隊が突入、食糧弾薬が補給されたのであつた。

この間、聯隊の山砲に続き、野戦重砲十、十五の両重砲聯隊が、至近距離にまで陣をすすめ、孤立する伊藤大隊を援護するとともに、城壁に巨弾を射ちこんでいったのであつた。そしてついに光華門の東に、傾斜四十五度という理想的な破壊口を作ることに成功したのである。

激戦激闘三昼夜、十三日未明、こうして第九師団の三十六聯隊、通称脇坂部隊はこの破壊口から城門に登り、感動の日章旗を掲げたのであつた。

しかしここでも犠牲は大きく、戦死大隊長以下二百五十七名、重軽傷五百四十六名となつた。大隊長以下一ヶ大隊が、ほぼ全滅したのである。

太平門

中山門のすぐ北にあるのが太平門だが、この城外一帯においては、紫金山から敗走してきた兵と、同じ紫金山から彼らを追うように進撃してきた津の三十三聯隊とが、激しい戦闘をくり展げ

た。彼らの中には、太平門からの脱出組もかなり混じっていたようだが、いずれにしても紫金山の激闘の直後でもあり、投降の気配があつても、殺気だった兵士らは、殺つちまえとばかりに襲いかかることが多かったという。

石松政敏氏 第二高射砲司令部副官

太平門外の深い溝の中にあつた死体は千以下であり、また城壁曲折部の百近い死体は手榴弾などによるもので、これは戦闘行為による戦死体である。

(『敵本戦史』)

二 城内中国軍の動き

だが暗くなったこの頃から、城内の中国軍には大きな変動が生じていた。城壁を破られた彼らは浮き足だち、それは時の経過とともに全軍の崩壊へと連なつていった。この時点における城内の中国兵は、三万五千ほどであった。

守将唐生智は、ようやくこの段階になつて、はじめて撤退命令を出したのだが、それはあまりにも遅きに失し、命令より先に兵士らは、先を争い北の各門を目指していた。

唐生智は全軍を揚子江を渡河する部隊と、陸路包囲網を突破して脱出する部隊とに分け、さらに陸路の部隊は、これを四群に分け脱出の城門と、集結地点をも併せ指定したのであった。この撤退作戦自体はそれでいいであろうが、最も大事な時を失したのでは、この脱出作戦は成り立たない。

その証拠に、城門を出たまでにはよいが、以後城西の湿地帯で第六師団に遭遇し、壊滅的打撃を受けた部隊、あるいは仙鶴門鎮や幕府山で捕虜になつた部隊、そして下関^{シャカ}で追いつめられた部

隊など、全軍の運命はきわめて悲惨なものとなった。

陸路をとった脱出部隊のうち、無事指定地寧国などへたどり着いたのは、その数わずかに三千ほどであった。ただ下関から早目に脱出した六十六軍、八十三軍などの部隊一万五千ほどが脱出できたのがせめてでもであった。

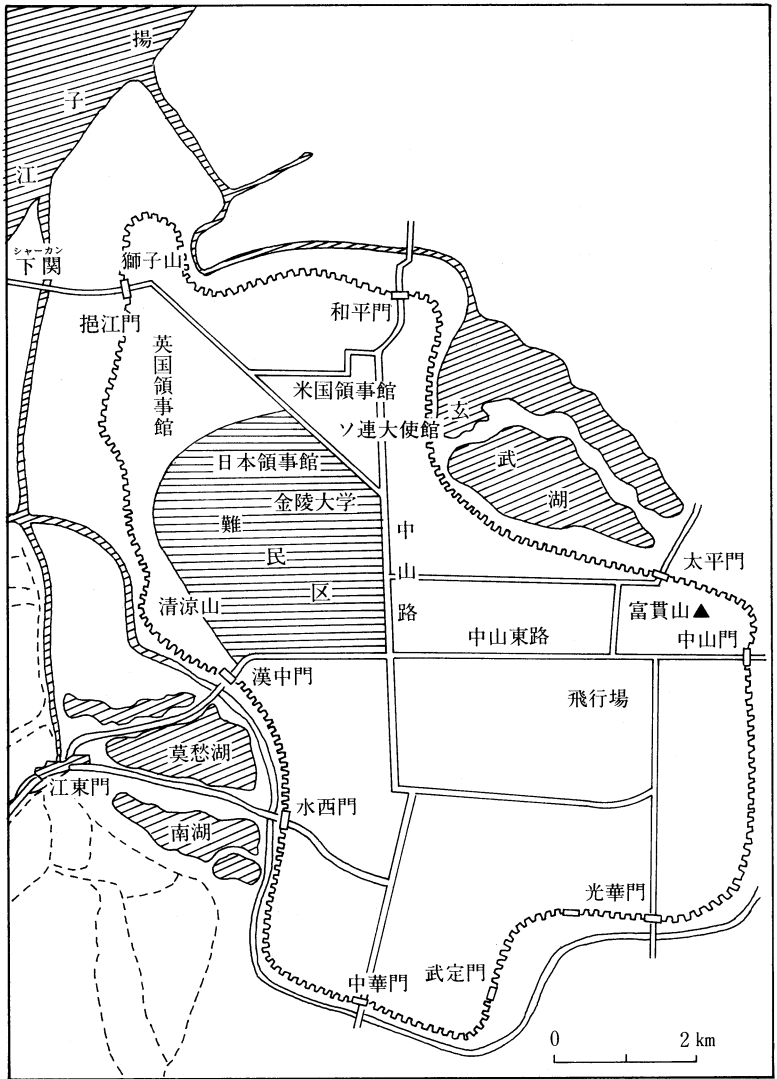
こうした状況を見れば、十二日夕刻の時点で、守将唐生智のとるべき道は、全軍をまとめ降伏する以外なかったのである。そうすれば、下関シャーカンや城西での無益な流血は避けられたし、またこれから触れる難民区の便衣兵問題も生じなかった。自軍の將兵を思えば、当然そうすべきだったのである。にもかかわらず、夕方になってやっと、

「撤退開始は今夜八時」

と命じ、その援護を八十八師に託すると、自らは司令部の要員を引き連れ、まっ先に下関から浦口へ渡ってしまった。そして、もはや漢口は無理と思ったのか、逆に東の徐州方向へと落ちのびていったのである。

これではどう見ても將たる資格はない。こんなことなら、初めから南京は放棄して撤退すればよい。事実中国軍の中には、その声が強かったのである。にもかかわらず、唐生智自身が防衛を主張したというのだから、よりいっそうその責任は重大である。

いつの時代でも、將たるものの器と能力は、多くの兵の命運を左右する。その悲劇のほうの典



型的な事例といわざるをえないのだが、その唐生智自身は、その後も生き抜き戦後の内戦では共産党に鞍がえし、革命委員会の常務員になったりしている。

三 各門からの城内突入

十三日の夜が明けると、各部隊はいっせいに南京城内へと進入していった。だがそこには、すでに敵兵の姿はなく、がらんとした人気のない街があるのみであった。壮絶な市街戦を想定していた各部隊は、むしろ拍子抜けの態であつたが、それでもいつ敵が飛び出してくるか分らない。慎重に、割り当てられた区域を進んでいったのである。

1 城壁角の破壊口から城内へ

南の城壁最左翼の、都城二十三聯隊も、城壁角にあげられた破壊口から進入、聯隊主力は城壁に沿って市街を北進、その右手を坂元大隊が同じく北へ進む。行動開始は、八時過ぎであつた。

坂元さかもと 氏 都城二十三聯隊第二大隊長

ちょうど十二時頃、道路の左側に飲食店が店を開いており、主人らしい一人の男がいたの
で、支那そばか何かを注文し、付近にいた者と一緒に、久しぶりに御馳走に舌鼓を打った。
銀貨で代金を払ったところ、主人は非常に喜んでいた。

一々家屋を点検したわけではないが、この飲食店以外には、市民も敵兵も見ず、また大し
た銃声も聞こえなかった。

(『敵本戦史』)

いかに中国軍が脱出した後とはいえ、店で支那そばを食べたというのは驚きである。相次ぐ内
戦で戦火にはなれているとはいえ、これだけの大会戦が、まるでなかったかの如くふるまえる中
国人、まったく遅しいと言うほかはない。日本軍にたいし、何の恐れをも抱いていないのだ。自
国の軍隊と戦っている日本軍は、彼らにとっては敵軍であるはずなのだが、まったくそのような
心配すらない。

2 光華門からの突入

十二日の夜でした。夜中の三時頃、敵の射撃がぴたりと止まったんです。これがよくある

西坂中氏 あたる 鯖江三十六聯隊上等兵

支那軍退却の形で、それから夜明け前でしたが、破壊口から城壁へ上っていきましました。

まだ薄暗さの残る城内には、敵影はまったく見られず、ただ静かな家並がそこにあるだけでした。遠く黒煙が、あちこちで上がってはいましたが、城内へ入っても、街はどこも破壊されていなし、綺麗なものでした。

死体で埋もれた地獄絵図？ そんなことはありません。我々より先に入って片付けたなんてこともないし。ただ城壁の上とか、城壁の外側には戦死体がありました。それは、あれだけの激戦を三日三晩くり返したんですから。

それで午後からは、それら敵味方の死体を集め、敵のは近くに埋葬し、友軍のは荼毘だびにふしました。しかし燃料は少ないし、苦勞しました。その煙を見ていると、無念さに胸がしめつけられるようです。

それでも、その夜読経のできる兵隊を集めて、敵味方の供養をしました。福井県には門徒衆が多く、お経を知っている者がたくさんいましたから。

軍規は厳正でしたし、第一強姦なんてそんな気分は毛頭ありませんよ。まして強姦二万件なんて、そんな馬鹿なことは絶対ありません。一般市民を虐殺するなんてそんなこともありません。

光華門内の地獄絵図というのは、戦後になって光華門内で一般市民多数の虐殺があり、そのため付近一帯は「屍体の山、血の海であった」などという虐殺主張があったため、一言質問したのである。だが、そのような状況はまったくなかったことがこれで確認された。

このことは、後述の証言もそのとおりである。

土屋正治氏 敦賀十九聯隊中隊長

十二月十三日早朝、歩兵第三十六聯隊は十日以来の激しい戦闘の末、光華門を完全占領した。

雨花台から転進した我々十九聯隊は、光華門から敵兵掃蕩そうとうのため城内に進入しました。

街の中はまったく損壊しておらず、それこそ瓦礫がれき一つ落ちていませんでした。死体もありません。綺麗なものでしたが、ただ人氣がまったくなく、しんと静まりかえった不気味さだけが漂っていました。いまだかつて味ったことのない、異様な寂寞感せまげくに包まれ、あれほど勇敢だった部下たちの足も思わず止まりました。そんな中で、氣付いたらいつしか私は中隊の先頭に立っていたんです。なおも前進すると、行けば行くほどまさに「死の街」の感深して、肅然とした街並だけが果てしなくつづいていく。

何キロくらい行っただでしょうか、大きな鉄筋造りの建物がありその講堂のような感じの大

きな部屋に入ると、ここには、護送の時間の余裕なく取り残された重傷の兵が收容されて、その枕辺にはたくさんの白衣の看護婦が、毅然として立っていました。正に驚嘆の光景。思わず私は深く頭を垂れ、静かに退去した。それから漢西門まで進み、引き返しました。

十四日湯水鎮より引き返し、直ちにこの建物に入ったのですが、重傷兵の姿も、白衣の人々の姿も見ませんでした。

戦闘終了後これ等の人々は、どうなったのだろうかと不安を抱き続けていましたが、後にニューヨークタイムズのダーゲン記者の記事を発見、これによると、十三日夜、戦傷者救援委員会の手で收容されたようであ堵しました。

その後十二月の三十一日まで、私の中隊だけ聯隊主力とは離れて市内に止まったのですが、私は行方不明になった部下の一人を捜して、城内全域をくまなく歩き廻りましたが、死体はほとんど見ていません。もちろん、一般市民を虐殺したなんてことはありません。それこそ平和がもどろつつある街でした。

私の知っている城内と雨花台方面に関するかぎり、婦女子をふくむ市民の虐殺なんてありません。幾万はおろか、たとえ五十人百人という数でも、虐殺があれば分るはずです。ただ時折、摘出された便衣兵が貨物車トラックに乗せられ、走っていくのを見たことはありません。

結局これが、今にして思えば、大虐殺と喧伝けんでんされる元になったのですが、現在言われ

ているような何十万虐殺なんていうことは、絶対にありえません。

3 武定門

大杉浩氏 野砲兵第三聯隊観測班少尉

十三日だったと思いますが、偵察将校として夕刻頃、武定門から城内に入りました。そこには彼我の戦死体が点々として散在していましたが、その中に一人の日本兵が手足を立木に縛られたまま、身に数弾を受けて死んでいました。私は一見して捕虜となった日本兵が支那軍によって殺されたのだと感じ、縄を切つて地上に下しておきました。城壁の近くには、支那軍の戦死体が相当数ありましたが、常民の屍体はありませんでした。

城門から一軒くらいしか入りませんでした。その間の銀行や官庁にはすでに憲兵が配置されており、日本軍の立入禁止の札が貼布されてありました。また一般民家もほとんど破壊されていませんでした。火事も見ませんでした。

作戦の全期間を通じて最も困ったのは、便衣隊であります。即ち急迫されると武器を隠して常民を装い、我々が心を許すと再び武器をとって抵抗します。武器を捨てた時には常民との区別が全くつけにくいので、遂には私達は必要に応じ全部落民を村の一隅に集結させ、監

視する方法をとったこともあり。そして便衣の兵が自首したり、また治安が回復した時には常民はすべて解放しました。便衣の兵は憲兵に引き渡しました。

(東京裁判記録三〇九号『南京戦史』より)

4 静かなる中山門

十三日、夜明け前のことであつた。将校斥候の一隊が、敵影のない静かな中山門を占領、

「午前三時十分大野部隊占領」

と、門の鉄扉に白墨で大書する。大野部隊とは、十六師団の福知山二十聯隊のことである。そして四時過ぎには、第二大隊が到着した。

そして五時半、九師団の富山三十五聯隊も、巨大な破壊口から城壁に登り占領、さらには十六師団の九聯隊も城壁に進出した。また夕方には、岩仲戦車隊の一部も到着し、中山門の土囊どのおうが除去されると、四時には突入し、城内掃討の精神的支柱となつていく。

この中山門付近にあげられた巨大な破壊口は、攻城重砲兵第一聯隊の二十四糎榴弾砲二門によるもので、さすがにその効果は抜群なものであつた。

十三日早朝、南京城の東、中山門近くの城壁に登る。すると、眼の前に飛行場があり、逃げ遅れた敵兵の姿が見えた。

八時頃になると、友軍が続々と入城してくる。中隊は再び進発し、飛行場を占拠。建物を一つ一つ点検。だが、敵影は見られず。さらに、街の方へと進む。夕方から夜にかけて、掃討もれの敗残兵が、苦しまぎれに放火しだした。その消火に東奔西走、消火にこれつとめる。十時すぎ、やっと夕食をとる。だが、その時、

「近くの工場に、敵兵数百が隠れている」

との報告ありただちに急行、その建物を包囲し、掃討を始める。敵は手榴弾を投げてきたが、それも次第におさまり、敵は逃亡していった。建物を調べてみると、ここは薪炭補給所で、木炭のぎつしりつまった倉庫もあり、盗まれぬよう封印する。ところが深夜十二時すぎに、

「残っていた敵兵が、薪炭倉庫に放火。目下燃烧中」

という報告に、自ら指揮して消火にあたったが、結局全焼してしまった。その夜、民家に宿営、ぐっすりと寝る。

小池秋羊氏 みやこ新聞記者

中山門では、扉の内側に何千袋もの土囊がぎっしり積みあげられていたが、兵隊が捕虜にも手伝わせて、その取り除き作業をやっていた。

正午近くになって、それも終り、中山門の鉄の巨大な扉が開いた。城内に入ると、どこも整然として、屍体一つ見られない。それに、難民区という旗が出ている一区画を除いては、全市人っこ一人いない。

首都南京は、凍るような静寂さと、沈黙の秩序とが守られていた。

(『敵本戦史』)

谷田勇氏 第十軍参謀

城内の治安良好なるをもって、十四日午前、軍司令部も城内に入った。そして、南京路にあつた銀行に司令部を置いた。その日城内を一巡、何枚かの写真をとつたが、若干の屍体は見たものの、市内は平静であつた。

(『敵本戦史』)

5 挹江門からの突入

下関^{シャークン}への通路であるこの挹江門^{ゆうかう}は、当然ながら中国軍の脱出路となる。十二日の深夜射撃が

びたりと止んだあの時、中国軍の脱出劇が始まったのだが、実はそれ以前から一部の兵の逃走は始まっていたのである。それからの挹江門は、混乱と争いの渦の中に巻きこまれていった。

だが中国軍にとって幸いであったのは、地理的關係もあつて佐々木旅団の進出が、南の各門より一日遅かつたことである。その間唐生智をはじめ一万五千の兵が下関から脱出できたし、さらにはそれに続く兵が、とにかく城外へ脱けられたのである。

二十四日朝、津の三十三聯隊は城内掃討に入るべく、近くの挹江門へ向かつた。前日の十三日は午後から下関の掃討戦に参加し、そのまま夜は下関に露營したのである。

凍てつく厳しい寒気の中、挹江門に着いてみると、そこは脱出劇の混乱の痕跡歴然たるもので、まさに悲惨な状況であつた。まず眼に入つたのは、城壁の上から垂れ下がる無数の綱で、それは衣服などの布を継ぎ合わせたりしたものが多く、途中で引きちぎられているものもある。

そしてその下には、多数の死体が折り重なり小山をなしているのであつた。降りる途中で転落した者、あるいは城壁上でもみあつて落ちた者、先を争い脱出しようとした有様が眼に見えるようであつた。

そして挹江門はというと、大量の土囊が積みあげられていたのだが、それも城門の外側に積んであつたのである。城門の内側に積むというなら、他の門と同様防備上の当然の処置として受け止められるが、ここだけは外側に積んであるのだから、まことに異様な光景である。これは、挹

江門が脱出路になることからして、それを防ぐためのもので、いかに彼らが自軍の將兵を信頼していなかったかを示すものであった。

結局これが綱による脱出劇を生み、このような犠牲者をだすにいたったのだが、津の三十三聯隊はまずこの土囊の取り除きをせねばならなかった。そして二時間の余、部隊はようやく通れるようになり、城内へと進入したのであった。

だがそこで眼にしたものは、またも異様な光景であった。それは死体とともに散乱するおびただしい軍服、軍帽さらには小銃などの小火器から鉄兜にいたるまで、あらゆる品々が広い路を埋めつくしているのであった。どれが死体やら物品やら、その区別すらつかない。

これらの死体は、脱出命令が出される以前に逃走しようとした兵士らで、怒った唐生智は、自ら指揮する三十六師に命じ射殺させたのである。だが彼らも抵抗し、ここに友軍相撃つ銃撃戦となった。それにしても、挹江門ゆうこうの閉鎖ゆうこうといい、この相撃といい、また自軍を背後から射つ督戦隊といい、何とも形容しがたい軍隊ではある。

ここでの遺棄屍は、城外が三百、城内はほぼ百であった。

ダーティン氏 ニューヨーク・タイムズ記者

十二日正午、水西門付近から、敵が城壁をよじ登ると、中国軍の崩壊が始まった。先ず、

八十八師の新兵が逃走すると、たちまち他の兵たちがそれに続いた。

夕方には、退却する中国軍は暴徒と化し、挹江門ゆうこうの方へとあふれて行つた。すでに指揮官もおらず、もはや中国軍は完全に壊滅し、ただ生きのびようということだけで動いていた。夕方、市内を車で廻つたが、一部隊全員が軍服を脱ぐのを目撃した。それは、滑稽こっけいといつていいほどの光景であつた。下関シャカシへ向かつて逃げる兵士たちも、途中で軍服を脱ぎ、小路に走り、市民から衣服を盗んだり、譲ってもらつたりして着がえていった。中には、素つ裸になつて、市民から衣服をはぎとつている兵士もいた。

軍服とともに、武器も捨てられ、路上には、小銃、手榴弾、剣、背囊、軍靴、鉄兜、など、でうずまるほどであつた。特に、下関シャカシ付近で捨てられたこれら軍装品は、おびただしい量だつた。また交通部から先には、機関銃、砲、トラック、指揮官の乗用車、荷馬車などが、ごみ捨て場のように、積み重なつていた。

その場にあつた者のみが語れる実相が、見事なほどに描かれ、まことに臨場感溢るものがある。

二日たった後でも痕跡はこのようにすさまじいものだったが、敵影そのものはなく、辺りは他の門と同様、静寂そのものであつた。激しい市街戦を予想していた将兵たちは、その不気味な静

けさの中を警戒しながら進んでいったのである。

敵は、どこかにひそんでいる。その予想は当たっていた。挹江門ゆじょうもんの左手、城壁に接する獅子山砲台まで来た時、やはり残敵と遭遇したのである。たちまち、激しい戦闘となった。だがそれもしばし、敵は総崩れとなり、さらに逃げようとする者、投降する者が続出した。

しかし最後まで抵抗し、射撃を続ける者も少なくなかった。こうした状況では、たとえ一部が投降の意志表示をしたとしても、それが受け入れられるとはかぎらない。そうでなくとも将兵は、昨日までの紫金山、下関シヤウカンの戦闘で多くの戦友を失い、激昂しているのである。結局ここでも殲滅めつ戦が演じられたのであった。その数ほぼ二百か三百、投降しながらも射殺された者も多かった。戦闘はここだけで、後は城内深く進んだものの敵影は見られず、この日の城内掃討を終えたのであった。

残るは難民区で、ここには一般市民が避難しているところだけに、すでに歩哨が立ち、特別に許可ある者以外は将校といえど入れなかつたのである。

島田勝巳氏 三十三聯隊機関銃中隊長

獅子山付近で百四、五十名の敗残兵を見つけ、襲いかかって殺した。中国兵は小銃は捨てても懐中に手榴弾や拳銃を持っている者がかなりいる。紛戦状態の戦場に身を置く戦闘者の

心理を振り返ってみると、

「敵を殺さなければ、次の瞬間こちらが殺される」

という切実な論理にしたがって行動したというのが、偽らざる実態であった。

(「南京戦史」)

島田氏の言うとおり、たとえ投降と見えても、拳銃などの武器を持っているし、いつ反攻に転ずるか分らぬとあらば、射殺もやむをえない。殺らなければ殺られるという戦場の実態がここにもそのまま現われている。

こうして城内突入、そして掃討の一日は終わった。それは予想外の静かなものであり、市街戦らしいものはわずかに獅子山の砲台付近だけだったのである。

しかし十四日には、富貴山の中国軍司令部で、地下壕に隠れていた残敵との交戦があり、三百二十八名が射殺されている。

6 捕虜の不法処断

このように、ここまでにいわゆる不法殺害なるものは見られないが、しかし純然たる不法行為

にあたるものが、まったくなかったかという、残念ながらそうは言えない。

それは雨花門外において、百十四師団所属の六十六聯隊第一大隊が、千二百四十の捕虜を、家に収容してから少しづつ連れだしては処断しているのだが、この場合は明らかに不法な行為と言わざるをえない。

高松半市氏 第一大隊第四中隊

数はそれほど多くはない。その半数くらいであったと思う。私の中隊で処分したのは百名くらいと思う。当時中隊で満足に行動できる兵は七、八十名で、捕虜監視に多くの兵力を割くことは不可能であった。

(『南京戦史』)

食糧もなかったためと記録にはあるが、これは便衣兵ではない。いかに激戦さなかの最中とはいえ、不法な捕虜殺害であることは明らかだ。

ただ数となると、第一大隊のみの行為とあるから、四ヶ中隊であることからして、千二百は誇大戦果と見られ、高松氏の言うように、実数は半分の六百程度ではないかと思われる。

なお三十三聯隊戦闘詳報には、付表ながら次のような記述がある。それは、十日から十四日の間の戦果としてだが、俘虜、将校十四、下士官兵三、〇八二 計三、〇九六 (俘虜は処断す)

と、ある。これについては、南京戦史を編集した偕行社でも、事実関係の調査を関係者に依頼しているが、現存者の方々の結論は、

「三千の捕虜処断など、誰も聞いた者がいない」

と、いうものであった。

結局これは、追撃戦における射殺、あるいは投降の意志表示したものの射殺された者、また中には投降しながら反抗の気配を示したため射殺された者もあるであろう。とにかく激しい戦闘の中でのこと、その内容を明確にすることなど不可能だが、それらを総集したものということのようだ。

ただ、それら戦果を中隊ごとに出させて、それを集計すれば当然その数は誇大なものとなってしまう。当時の聯隊本部通信班長平井秋雄氏、大隊副官堤千里氏などが調べての結果だが、そういうと、

「現存者が口をそろえ、知らないと言っているのではないか」

と思う人もいるかもしれないが、多数の人間の口を封ずるなどということは、まずもつてできることではない。そんなことをしても、必ず誰かの口から漏れる。またさらには、これが第六師団の捕えた四千の捕虜である可能性も否定できない。とにかく場所が同じ下関ジャクソンなのであるから。

四 難民区の掃討

1 立入禁止の厳命

難民区、そこには逃げ遅れた市民、あるいは逃げ場のない市民が四軒キロ弱四方くらいの狭い地域にぎっしりとつめこまれていた。その数およそ十六万余、そのほとんどは貧しい人々で、金のあ
る市民はいち早く避難していったのである。

この難民区には、十四日には早くも要所要所に歩哨が立ち、憲兵も進出していた。前日の十三
日が城内突入、そして掃討戦であるから、まさに間髪を入れず難民区を保護していったのであ
った。

もちろんこれは、市民と日本兵との間に不祥事を起こしてはならぬという配慮からで、城内突
入以前から厳しい通達が出されていたのである。

それは松井軍司令官直々の通達であり、

「難民区、外国権益、文化史跡などにたいする砲撃、爆撃を禁止する。また城内突入後も、これらの地域には一兵たりとも入ることを禁ずる」

と、いうものであった。これに基づき各隊の指揮官は、地図の上にこれらの地域には赤印をつけて、この命令を厳守してきたのである。また、さらに南京城攻略要綱の中には、次のような文面が見られる。要略すると、

一、軍紀風紀を厳正にし、いやしくも名誉を傷つけるような行為は、絶対してはならない。
一、外交機関、外国権益には近づかないこと。難民区には歩哨を配し、城外の中山陵、明孝陵なども立入禁止とする。

一、不注意の失火、掠奪などは厳罰に処する。これら不法行為は憲兵に摘発させよ。

この命令を発した後、さらに念をおすためか、松井大将は、異例ともいふべき訓戒なるものを、自ら筆をとりこれを示達している。普通の場合すべて命令書などは、担当の参謀がこれを書き、参謀長や司令官はただそれを承認するというのがおおかたで、軍司令官自ら命令書を書くなどめつたにあることではない。

これも、文章がむつかしいので要約すると、

「南京は、中国の首都であり、この攻略は世界注視するところなれば、日本の名誉をいっそう

發揮し、中国民衆の信頼を増すようにしなければならぬ。特に敵軍といえども、戦意なき者、一般官民にたいしては、寛容慈悲の心をもって、愛護すべし」

これもまた一兵にいたるまで徹底せよ、と命じたのである。理想的な皇軍の姿を、内外に示したかったのであろう。

そしてこの軍司令官の命にもとづき、城内の難民区などを担当した旅団長、秋山義兌少将は、さらにこれを具体化した旅団命令を発している。実際に難民区を担当したのは、金沢の第七聯隊だが、その聯隊長伊佐一男大佐は、これにしたがい部外者の立入り厳禁などを命じ掃討に入った。ために、たまたま難民区の状況を視察しようとした脇坂次郎大佐は、入り口で歩哨の兵に阻まれ、入ることができなかつたという。大佐でさえ入るのを拒否されるほど、兵士たちはその命を守つたのである。まさに異常と思えるほどの徹底ぶりであつた。

確かに、置かれた情況は厳しいものであつた。欧米諸国の領事館はあるし、報道関係者も残つている。また揚子江上には、米英の海軍もいる。つまり世界中の眼が注がれている中での南京攻略戦であつた。

それだけでなくとも、対日批判が昂^{たか}まつていることからしても、些細な不祥事でもたちまち世界に報じられ、いかなる非難を浴びるか分らないのである。もつとも中国を愛する松井大将のこととて、こうした事情がなくともこれら保護手段をとつたであらうが。

2 難民区の実態

ではこれほど嚴重に保護された難民区とは、どのようなものであったのか、いま少し詳しく追ってみよう。まずその成立だが、これは日本軍突入の半月ほど前のことであつた。

十二月一日、南京市長、馬超俊は、残留市民にたいし、

「食糧と身の廻り品を持つて、難民区に移住せよ」

という、布告を出したのである。そして、設立された南京安全区国際委員会に、米三千トン、麦一万トン、金子十万両と警備の警察官四百五十名を預託し、市民の安全保護を依頼した。

南京には、以前からかなりの欧米人が在留していたが、その多くはすでに避難しこの時まで残っていたのは、四十人くらいであつた。そして、そのうちの十五人が国際委員会を作り、難民区と呼ばれた安全区域を設け、自身や市民を戦禍せんかから守ろうとしたのである。

この国際委員会は、ドイツ人のジョン・ラーベ氏が委員長となり、以下アメリカ人七人、イギリス人四人、その他デンマーク人、ドイツ人などであつた。

しかし、日本側は当初これを認めなかつた。何故なら、そこが中国軍の武器隠匿所になる危険性があつたし、また中国兵が逃げ込み、便衣兵となるおそれもあつたからで、それを排除するだ

けの力を持たぬかぎり、中立地帯としての難民区は認められない、としたのである。とはいえ、実際には無視することもできない。

そこで軍司令官以下の命令となったのだが、果たせるかな案じていたとおり、難民区の中立性は守られず中国兵逃げこみの場となってしまったし、また治安とて満足に維持できなかったのである。

エスビー氏 米国副領事

日本軍が入って来る前の数日間、支那兵自身によって、暴行、掠奪が行なわれた。軍服を脱ぎ常民服に着替える際に、さまざまな事件が生じ、中には衣服をはぎとるため、殺人をも行なった。

また市民の中にも、計画的に掠奪した者がいた。大部分の市民が脱出し、公的機関が機能停止した市内は、混乱と無秩序とで、どんな不法行為をもなし得る状況であった。とにかく、数千の支那兵は、軍服を常民のにかえ、市民に混って、市内のどこかに隠れていた。

このため、残留した市民は、むしろ日本兵が入ってくれば、待望の秩序と統制が恢復するだろうと、日本人を歓迎する気分になっていた。

市内のどこかに隠れていた、とあるが、そのどこかが難民区だったのである。

3 便衣兵

難民区に逃げこんだ中国兵、これは面倒な存在であった。軍服を脱ぎ捨て一般市民の中にまぎれこんでいったのだから、これは明らかに便衣兵である。たとえ反撃の意図はないと主張しても、それは通るものではない。まして彼らの中に、武器を隠匿している者がいたりすれば、なおのことである。

それだけでなく、将兵たちはこの便衣兵にたいしては神経質になっている。中国兵への憎悪の念は、この便衣兵によるところが大であったといってもいいくらいで、その被害もすでにかなりのものとなっていた。

第三師団の先鋒部隊が、上海の呉淞^{ウイスン}棧橋^{せんばし}に上陸したおりであった。

棧橋近くには、日本人の婦人団体とおぼしき人々が列をなし、手に手に日の丸の旗を振つての歓迎で、上陸する将兵たちの顔にも思わず微笑が浮かんだ。そして隊列が婦人団体のすぐ近くまで来た時であった。

突如小旗は捨てられ、さつと身をひるがえすと、背後に隠していた数丁の機銃が、猛然と火を

ふいた。あつという間もない。たちまちのうちに一ケ中隊はほぼ全滅、辛うじて難を逃れた兵士らは、ただ無念の涙をのむばかりであった。

この一事は、広く将兵の知るところとなり、中国兵への怒りと憎しみを倍加させたのである。そしてその警戒も怠らぬようになってはいつたのだが、何せ相手は一般市民の装いをしていただけに、長い間にはつい油断も出る。女だと思い、構わず飯なんか食っていると、背後から不意にやられる。こんなことも、後をたたなかつたのである。

このように便衣戦法というのは、しかけるほうにとつては効果的だが、やられるほうはたまらない。それと悪いことには、これを多用すると、戦闘員と非戦闘員との区別がつかなくなることである。となれば、時には市民が巻きぞえを食うことになりかねないということだ。

戦場は所詮殺し合いの場とはいふものの、やはりそこには自ずから規則ルールというものが無いと、いたずらに市民が巻きこまれ、戦争自体がよりいっそう悲惨なものになっていく。

だからこそ、戦時国際法 陸戦法規においても、この便衣戦法を禁止したのである。そしてこれに違反した場合、つまり便衣兵にたいしては、厳しい態度でのぞんだ。捕えられた場合は、重犯罪人としての処断、これがそうなのである。

一見残酷なようではあるが、多くの非戦闘員を守るためにはやむをえない。国際間のとり決めとしてこれを採用したのだが、反対に正規の軍人として戦えば、捕えられた時には捕虜としての

待遇を要求できる。

軍人とは軍服を着用し敵味方の識別が明確であり、なおかつ指揮命令系統を有する軍隊に所属していることだが、これとて戦いの場においては、捕虜としてとらぬはその時の状況いかんというのだから、まことにもつて厳しいものがある。机上で法律解釈をしているような具合にはいかないのである。この辺のところは、実戦経験者が特に強調するところで、さもありませんと思ふ。

十二月十四日、難民区に逃げこんだ中国兵の抽出が始められた。いかに市民を装ったところで、今の今まで兵隊だった男が、一夜にして市民になりきれものではない。坊主頭がすぐ伸びるわけでもないし、兵士としての面影や挙動は、そう簡単に隠しおせるものではない。下着までは換えなかった、という者もある。

この日、七聯隊の将兵は二百五十人ほどを便衣兵として抽出、その他反抗の気配を示した七十名くらいを、その場で射殺した。同時に小銃、軽機など二百丁の余、手榴弾五万五千発などを押収、その他、対戦車砲まで隠し持っていたのである。

これだけ大量の武器を隠していたのでは、便衣となり反攻の機をうかがっていたとされても、反論の余地はない。

抽出不徹底と判断した軍は、十六日再度難民区内の便衣兵抽出をおこなった。翌十七日は入城式である。万一のことがあつてはならぬという配慮もあり、この日はかなり厳重な選別となつた。

水谷莊氏 第七聯隊第一中隊一等兵

各中隊とも何百人も狩り出してくるが、一中隊は少ないほうで、それでも百数十名を引きたててくる。市民と認められる者はすぐ帰して、三十六名を銃殺する。

一旦^{いったん}百数十名を抽出したものの、再度調べてみると兵士と断定し得るのは三十六人だったという。確かに実際となるとその判定は難しい場合もあるであろう。第一中隊が三十六人とすれば、聯隊には十二中隊まであるから他中隊がほぼ同数なら四百人余ということになる。

だが、他中隊はもつと多いという。これもそう思えたという可能性は強いが、仮に各中隊百人とすれば千二百人となる。結局この日、第二回の抽出では多くても千五百とみられ、前回の二百五十人と合わせて千七百五十となる。

これらからしても、便衣兵抽出は最大でほぼ二千と聞いていいと思うが、後の東京裁判においても三人の中国人が三通りの証言をしている。それが千、千五百、五千ということだから、二千という数はおおむね妥当かと思われる。また当時の日本の報道関係者も、だいたい同じような数

を出しているので、大きな狂いはない。

これ以上正確な数は、今日となつては把握のしようもないのだが、ただ当事者である七聯隊の伊佐一男大佐は、日誌に便衣兵抽出六千五百と記している。これについて、参戦者の所見をたずねたところ、

「事実かもしれぬ」

という答えと、

「誇大戦果であり、実際はその半分かそれ以下であろう」

という二つの答えがあつたが、後者の意見が多い。功績はどうしても多く書きたがるから、というのである。いずれにしても抽出にあたつた七聯隊内部でも、隣の中隊のことはまつたく分らないというのが実情であるから、正確な数は分りようがない。

当時の状況、つまり難民区から出た大量の武器、そして湯水鎮の司令部が敗残の大軍に襲われるという事態、そして十七日の入城式を控えていることなどから、伊佐聯隊長もせつば詰つた心境に追いやられていたこともあり、結局は処断せざるをえなかつた。こうしたことは、平和な今日ではまことに理解されがたいところかもしれぬが、この当時としてはこれ以外なかつた、ということであらう。

だが参戦者の中にも、

「反抗の気配ある者はやむをえないが、従順な便衣兵もいたであろう。それらを皆一緒にして殺害したとすれば、過剰防衛、不法行為と言われてもしかたがない」

という意見もある。

十七日、この日南京入城式がおこなわれた。そして城内の警備は、十六師団の佐々木旅団に引き継がれたが、同旅団はさらに難民区の便衣兵抽出をおこない、正月の五日までの十九日間に、さらに二千の便衣兵を捕えている。この時は中国人が作っている治安維持会が立会い、憲兵が抽出をおこなった。彼らは、捕虜として旧外交部の建物に収容されている。

またこの時、一般市民には良民証が渡され、これがほぼ十六万枚であった。子供と動けぬ老人を除いて、だいたい全員に行き渡ったものと思われるが、これが結局難民区の市民人口だということになる。

これで良民と便衣兵の選別はすべて終わったのだが、この時捕えられた一人に劉啓雄氏がいる。

劉啓雄氏 中国軍旅長

私は難民区に潜入し後に摘出されたが、便衣兵の処分は大体二千ないし三千くらいとみている。

この劉氏は、雨花台ならびに光華門方面を守備した旅長、つまり旅団長であったが、その後難民区に逃げこみ、摘出によつて捕虜となつた。その後收容所にいる時大西參謀にその人柄をかわれ、南京の新政府に登用された一人である。劉氏はその後、軍官学校の校長などを務めているが、この談話は当時同じ新政府に勤務していた福島佐太郎氏が、劉氏から聞いた話として南京戦史がとりあげたものである。

劉氏はこうして汪精衛の新政府にとりたてられたが、一般の兵士らは、これも新政府の綏靖軍すいせいに、その多くが編入されていったのである。

城内の掃討は以上のようなものであつたが、それでもその後、奇妙な虐殺話が時折浮上する。清涼山での二万人虐殺などもそれで、まったく根も葉もない噂話にすぎない。

坂元ちかし昵氏 都城二十三聯隊第二大隊長

清涼山で二万以上虐殺された、などと新聞は書いているが、十三日の四時半頃、尖兵である第六中隊が清涼山に達し、重砲六門を鹵獲ちかくしその日は命令によつて前進は中止し、その夜は付近に宿営した。

翌十四日は後退し、水西門の東側付近の城内に宿営した。そして翌年の一月三日蕪湖に出発するまで、そのまま駐留していた。その間城内は静かなものであつた。清涼山は近くだか

ら、もしそのようなことがあれば、我々に分らぬわけがない。

十八日か十九日ごろと思うが、夕刻宿舍の西北方で機関銃の銃声が聞こえた。変だと思い翌朝、森本曹長をつれて水西門城壁に登ってみた。

すると城壁と水濠との間の斜面に、中国兵の死体が五、六体転がっていた。後で聞いたところによると、規律に違反した捕虜を銃殺したのだという。

現在の中国でも、教科書に次のように書かれているとのことである。

「日本占領軍は南京を占領した後、気違いじみた大虐殺を展開した。平和に暮らしていた住民は射撃練習の的にされ、刀で斬られ、石油で焼き殺され、はては心臓をえぐり取られる者もあった。一ヶ月余りの間に殺された者は三十万人を下らず。等々、南京城内には死体が累々と横たわり、暗い冬の風がすさまじく吹き渡って、さながらこの世の地獄となった」

これには、まさに啞然たらざるをえない。だが城内の実態はかくの如くであり、我が日本民族は彼らが言うような残虐非道な民族ではない。私は南京大虐殺というが如きいま忌わしい事件があつたなど、断じて認めるわけにはいかない。

(『敵本戦史』)

4 日本の軍事探偵

これで南京攻略作戦は終了したが、便衣兵については、さらなる考察をしておこう。それは、日本でもごく限られた形ではあったが、これに近い戦法をとった時代があったということである。それは日露戦争における軍事探偵であった。本来の任務は情報員であったが、機を見て後方破壊の任も果たしていった。この時滿蒙各地に潜入していった軍事探偵は、正規に養成された者百六名、これに各補助員が二、三人ついたからほぼ四百人近いと思われる。

さらに北京公使館に所属した情報員と、自らこれに参加した人々四十八名、また參謀本部から派遣された情報將校など、その総数はかなりの数にのぼっている。そしてこれらの人々は、任務の性質上生還は期しがたいと、充分承知の上この任に付いたのである。捕えられたらもちろん、ただ疑われただけでも殺される、これが当時から一つの国際慣例となっていたからで、果たせるかな北京公使館を出発した横川省三らは、ハルピンに着いたところを捕えられ、逃げた六名は山中で惨殺、横川と沖禎介は銃殺され、開戦一月にしてこの班は全滅してしまった。

この横川、沖処刑の現場には、おりしも外国人記者がいたため、大きく報道され日本でも広く知られるところとなったのだが、これは例外的なことで、その多くは人知れず処理されてしまう。

そして戦いが終わった後、百六名の軍事探偵のうち、奉天に集結しえたのは、何とたった七名だったのである。後はいずくで果てたか、その消息すらつかめない。ただ旅順で日本文情報員十三名銃殺などが外電で報じられているが、これもたまたまそこに外国人記者がいたからで、さもなくばそのわずか一行の記事ですら世には出なかったことになる。

しかしこれが、情報員と後方破壊の任に着いた者のたどるべき道であり、それだけ重い責任を負わねばならないのだと、当初から覚悟しているから、その処理にたいし何らの異論も出されていない。

それと、この場合他の一般市民に累を及ぼすことはまったくなかった。それは満蒙における日本人ということもあるが、中国軍の場合は自国領内であるだけに、難民区一つをみても、市民が常に巻きぞえを食うということだ。

日本でも沖繩戦は自国領内での戦闘となったが、この場合、民間人もすべてが戦闘員となったため、米軍もそのつもりで戦闘をしている。つまり市民を装って不意打ちを食らわすということは起きていないのである。

だが第二次大戦以後は、ベトナムにしても、アフガンにしても、ゲリラ戦がむしろ主流となつてしまい、便衣兵という考えはなくなつてしまった。したがって私服による戦闘行為が不法だという観念そのものが消え去つてしまったのである。

だが少なくとも第二次大戦までは、便衣兵の概念は明確に存在したし、欧州戦線においても反^{パル}抗組織^{チザン}の者と分れば処刑されたのである。

半世紀前の南京戦と、今日の戦争とではその様相が一変しているのと同様、この便衣兵^{ゲリラ}にたいする考えもまるで違っているということを承知していないと、とかく論議は空廻りする。結局、

「便衣兵の処刑は、戦闘行為の一環であり、不法行為とは言えない」ということである。

そしてなお言うなら、切迫した状況から生まれたやむをえざる処置でもあったのだが、今日なおかつその責を論ずるなら、そうせざるをえない状況を作った、つまり市民の中にもぐりこんだ中国側の責をも問われねばなるまい。これは明らかに国際法違反であるし、降伏していれば、このような事態にはならなかったのであるから。